2006年度　事業の概要

1 調査と研究 …… 26
飛鳥藤原京の発掘調査 …… 26
平城京の発掘調査 …… 27
企画調整部の研究活動 …… 27
文化遺産研究部の研究活動 …… 28
●歴史研究室の調査と研究 …… 28
●建造物研究室の調査と研究 …… 29
●景観研究室の調査と研究 …… 30
●遺跡整備研究室の調査と研究 …… 30
埋蔵文化財センターの研究活動 …… 31
●保存修復科学研究室の調査と研究 …… 31
●環境考古学研究室の調査と研究 …… 31
●年代学研究室の調査と研究 …… 32
●遺跡・調査技術研究室の調査と研究 …… 32
国際学術交流 …… 33
●中国社会科学院考古研究所との共同研究 …… 33
●遼寧省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●河南省文物考古研究所との共同研究 …… 33
●韓国国立文化財研究所との共同研究 …… 34
●西アジア文化遺産保存修復のための緊急協力事業 …… 34
●異なる環境条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究 …… 34
海外からの主要訪問者一覧 …… 35
海外からの招聘者一覧 …… 35
奈文研研究者の海外渡航一覧 …… 36
公開講演会 …… 39
第98回公開講演会 …… 39
第99回公開講演会 …… 39
研究集会 …… 40
文部科学省科学研究費 …… 41
学会・研究会等の活動 …… 45
文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等 …… 46
●平城宮跡の整備 …… 46
●高松塚古墳の発掘調査 …… 46
●キトラ古墳の調査 …… 47
発掘調査現地説明会 …… 47

2 研修・指導と教育 …… 48
埋蔵文化財担当者研修と指導 …… 48
京都大学（大学院）との連携教育 …… 48
奈良女子大学（大学院）の連携教育 …… 48

3 展示と公開 …… 50
飛鳥資料館の展示 …… 50
平城宮跡資料館の展示 …… 50
解説ボランティア事業 …… 51
図書資料・データベースの公開 …… 51

4 その他 …… 52
刊行物 …… 52
人事異動 …… 56
予算等 …… 57
職員一覧 …… 58

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

都城発掘調査部が飛鳥藤原地区において2006年度に実施した発掘調査は、藤原宮跡２件・2,024㎡、藤原京と飛鳥地域９件・2,320㎡の計11件・4,344㎡である。以下、主要な調査成果について概要を述べる。

藤原宮では朝堂院東第四堂の学術調査をおこなった（第142次・第144次調査）。東第四堂は大規模な南北棟建物であるため、春と夏の２時期にわたる調査となった。南半部の第142次調査では、遺構の残存状況が悪かったものの、東第四堂の礎石据付痕跡、造営時の排水溝と解体時の足場跡などを確認した。また、朝堂院を囲む東面回廊まで調査区を拡張し、東面回廊の西雨落溝、回廊東の大溝などを確認した。

いっぽう北半部の第144次調査では、南半部よりも残存状況が良く、東第四堂の変遷を明らかにできた。東第四堂は戦前の日本古文化研究所による調査では東西４間、南北15間と復元されていた。しかし今回の調査により造営当初は東西５間、南北15間で、のちに東西を１間分縮小したことが明らかになった。この改造が建設途中の計画変更であるのか、大規模な建て替えであるのかは重要な問題である。朝堂院全体の変遷を考慮しつつ、出土遺物の整理を通じて慎重に検討する必要がある。

飛鳥寺では、寺域内にある来迎寺の塀新設に伴う発掘調査をおこなった（第143－６次調査）。調査地は中金堂の北、講堂の西南隅に当たる。講堂は50年前の調査で桁行８間、梁行４間の四面庇付東西棟礎石建物であることが判明している。今回の調査では南側柱の礎石を新たに３個確認した。礎石の大きさは約1.5ｍ、径約80㎝の柱座をもつ。また礎石据付掘形も検出し、基壇の詳細な状況が明らかになった。

甘樫丘東麓遺跡では面的な発掘調査に着手し、７世紀代の大規模な整地と建物群を確認した（第146次調査）。遺構の時期は３時期に分けられる。まず７世紀前半には谷を埋め立てて石垣を築き、平坦面に建物や塀を建てる。７世紀中頃には石垣を覆うように土を盛り、再び建物や塀を建てる。さらに７世紀末にも埋め立てをおこない、溝や炉を設ける。７世紀全般にわたる土地利用が判明した。なお、昨年度の調査以来、当遺跡は蘇我氏邸宅との関連性が指摘されてきた。遺跡の性格については谷全体における遺構の広がりを把握する作業が不可欠であり、周辺の調査が待たれる。

石神遺跡では、昨年度に引き続き遺跡北側の空間利用の解明および「阿倍山田道」の検出を目的として発掘調査をおこなった（第145次調査）。調査の最大の成果は、７世紀後半における山田道の南側溝を確認したことである。今回の成果と1990年に調査した山田道第２次調査の成果を合わせれば、道路幅21～22ｍの阿倍山田道が復元できる。ただし、阿倍山田道そのものは７世紀後半よりも古い時期から存在したと考えられている。今回の調査区では下層でも道路状の盛土を確認しており、それが古い段階の阿倍山田道であるのか、今後の検討が必要である。

高松塚古墳では、平成18年10月から国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に伴う発掘調査を実施している。調査は文化庁の委託事業で、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会と共同で進めている。現在は石室と同じ温湿度に調節した断熱覆屋内で、壁画の保全を図りながらの調査が続く。墳丘は土を層状につき固めた版築で築かれている。１層の厚さは３～５㎝前後で、版築は100層以上に及ぶ。墳丘の下半部の版築層からは、ムシロ目状の痕跡が何層にもわたって確認できた。斜面に版築を施す際に盛土を安定させるための工夫と見られる。さらに版築層の掘り下げ中に、版築層を突き破る多数の地割れや亀裂を確認した。これは奈良盆地を幾度も襲った「南海・東南海地震」の痕跡であろう。３月末の段階で、石室の天井石と側壁が現れ、天井石のうち１枚が予想外に小さいことも判明した。解体修理に伴う調査は山場を迎えている。

なお、今年度の発掘調査に伴う現地説明会・見学会は以下のように実施した。

飛鳥藤原第142・144次（朝堂院東第四堂）
　現地説明会　2006年５月30日　中川あや
飛鳥藤原第143-6次（飛鳥寺）
　現地説明会　2006年11月14日～11月16日
飛鳥藤原第147次（高松塚古墳）
　現地説明会　2006年12月１日～12月２日
飛鳥藤原第146次（甘樫丘東麓）
　現地説明会　2007年２月11日
飛鳥藤原第145次（石神遺跡）
　現地説明会　2007年３月31日　小田裕樹

平城京の発掘調査

2006年度の発掘調査は平城宮跡６件、平城京跡13件の計19件である。主要な発掘調査として、平城宮跡では東院地区（第401次）、東方官衙地区（第406次）、平城京跡では西大寺食堂院および右京北辺（第404・410・415次）、旧大乗院庭園（第407次）の各調査が挙げられる。その他の調査は、いずれも小規模調査で、詳細については『奈良文化財研究所紀要2007』を参照されたい。

平城宮東院地区の発掘調査（第401次）は、５年計画ですすめる東院中枢部分の本格的な解明にむけた１年目となる発掘調査である。1998年度に大規模な一連の総柱建物群が見つかり、中枢部分解明への嚆矢となった第292次調査区の東側にあたる。今回の調査でも複雑に重複する掘立柱建物や塀、石組溝などが見つかり、５期にわたる遺構変遷が明らかとなった。これらの遺構群の性格を理解するためには、より広い視野での区画、建物配置が必要であり、来年度以降は東側に発掘調査を展開する予定である。

第二次朝堂院の東側に展開する官衙地区の発掘調査は、これまで北側を中心におこなわれ、磚積官衙施設や造酒司、宮内省と推定される区画が遺構展示館として整備されている。その南側は長らく調査が及ばなかったが、第二次朝堂院と東院地区に挟まれる立地などから「東方官衙地区」として重要な官衙が存在すると推定されていた。都城発掘調査部では、この東方官衙地区の解明をめざし、今後数年にわたって発掘調査を進める計画である。今年度は６ｍ幅のトレンチを南北121ｍ、東西101ｍに配して試掘的な調査をおこなった。その結果、大型の礎石建物や掘立柱建物、築地塀などが見つかり、第154次調査（1983年度）で北端を検出していた官衙区画の南限は調査区外に伸びることがわかった。これにより、この官衙区画が東西約50ｍ、南北120ｍ以上の大規模なものであることが明らかとなった。また、今回の調査では第二次朝堂院と基幹排水路SD2700に挟まれた地区にも官衙施設が存在することを確認した。

西大寺食堂院および右京北辺の調査は、マンション建設に伴う緊急調査として実施した。調査区の南側では食堂と思われる礎石建物（1998年　奈良市第12次調査）を、北側では南北に伸びる埋甕列など（2002年奈良市第15次調査）を、それぞれ奈良市教育委員会がマンション建設に伴う調査に際して検出している。今回の発掘調査では、東西棟の礎石建物、それらをつなぐ軒廊など、西大寺の「資財帳」の記載と規模が同じ建物跡を検出し、周辺の調査とあわせて、具体的な食堂院の建物配置が明らかとなった。この調査では平城京でも最大の平面形をもつ蒸籠組の井戸も見つかり、なかからは延暦期の木簡とともに多量の土器、木器、瓦磚類、食物の残滓がみつかった。とくに木簡は奈良時代後半の寺院経営の実態を示す貴重な資料である。また、年輪年代測定から井戸枠の伐採年が西大寺の造営が始める頃の767年であることも明らかとなった。

大乗院庭園の調査では、東大池の西岸に入江状に残る未発掘部分を調査した。これにより西小池全体の形状が明らかとなった。これまでの所見とあわせて、『興福寺旧大乗院庭苑図』（1939年模写）の写実性を確認するとともに、断割調査によって東大池、西小池の造成方法および時期について確認することができた。

2006年度の発掘調査に伴う現場一般公開、現地説明会は以下のとおり。

第404次調査（西大寺食堂院）
　現場一般公開　2006年６月30日　大林　潤
第404・410次調査（西大寺食堂院）
　現地説明会　2006年10月７日　馬場　基
第401次調査（東院地区）
　現地説明会　2006年12月９日　和田一之輔
第406次調査（東方官衙地区）
　現地説明会　2007年３月24日　粟野　隆

企画調整部の研究活動

企画調整部は、平成18年度に新設され、地方公共団体等の職員に対する研修、写真を含めた研究所関係の調査研究成果や文化財情報についてシステムの整備充実と収集整理、国際協力と交流、あるいは国際研修等の企画調整、飛鳥資料館・平城宮資料館等での展示公開普及を中心に、奈良文化財研究所がおこなう研究に係る事業について総合的に企画調整し、成果の情報発信・活用を担当している。

埋蔵文化財担当者研修については、企画立案を進め、

基礎課程を廃して、より高度・専門的な研修を実施した。特に遺跡に占める割合が高く、調査に専門性の高い知識・方法が求められる古代の集落や掘立柱建物・礎石建物、陶磁器を取り上げ、保存科学についても有機遺物と無機遺物に分割するなど、より詳細化・専門化を図った。また、文化庁の高松塚古墳・キトラ古墳の保存活用など国・地方公共団体がおこなう事業については、全所的に専門的・技術的な協力・助言をおこなっているが、所内および対外的な調整を担当した。

文化財情報の電子化及びシステム構築については、研究会等においてそれらの研究成果を公表するとともに、所外の研究状況について情報を収集し、今後のシステム構築、改良等の検討材料とした。10月には地理情報システム学会大会において「遺構情報の考古学研究における応用スキーマ・モデル適用のメリット」と題して、遺構情報の分析に関する研究成果を発表した。また、同月に第11回となる遺跡GIS研究会を開催し、メタデータ共有の問題、GISに関する最近の動向、Web-GISや3次元計測の活用について研究発表がおこなわれた。

文化財情報の電子化として、木簡、図書、抄録、写真、遺跡、航空写真等の各データベースにおいて、データの更新ならびに追加入力を行い、データの充実に努めた。また、業務用のデータベースについては、各担当で作成したデータの追加をおこなった。

写真データベースの基礎となる写真の電子化に関しては、35mm、ブローニ、4×5、8×10、ガラス乾板、奈文研が発注した空中写真について電子化を継続した。航空写真データベースにおいては、入力の基礎となる原フィルムからのマイクロフィルム作成、マイクロフィルムからの電子画像の作成を継続しておこなった。

飛鳥資料館が実施した展示の企画・公開などについては、別項にまとめて記しているが、平城資料館のリニューアル計画も進めている。先回の改装から15年がたち、老朽化したことと、新たな研究成果を反映させるために展示委員会も開催して基本構想を策定した。また、国際協力と交流、国際研修等の企画調整についても別項に記載した。

また、写真関係業務については、昨年度のキトラ古墳壁画原寸大精密フォトマップの作成に引き続き、同じく高松塚古墳壁画の解体保存修復事業についても文化庁の委託を受けて、石室解体前の写真記録を撮り、解体時の作業方法の検討や修復時に利用することを目的に、原寸大精密フォトマップの作成、4×5フィルムによるカラーポジ、モノクロ写真撮影を実施した。原寸大フォトマップは、デジタルカメラをオートフォーカスの中判カメラボディに装着し、特注で設置した滑動台上を平行・垂直移動して石室壁面に正対させて撮影した。歪みのない中央部200㎜四方の範囲を、石室外からコンピュータとケーブルを接続して順次遠隔撮影し、画面を繋いでいく手法である。一方、埋蔵文化財担当者研修『文化財写真（基礎）、Ⅱ（応用）課程』、『報告書作成課程』と『遺物観察調査課程』の一部を担当すると共に、大阪府高槻市教育委員会の委託を受けて史跡闘鶏山古墳の未盗掘・未破壊古墳石室の内部撮影を初めておこなうなど国・地方公共団体がおこなう事業について、専門的・技術的な協力・助言をおこなっている。闘鶏山古墳では、石室に見られた幅20～28㎜、長さ100㎜前後の隙間に、厚さ18㎜で88万画素の改造したデジタルカメラと全方位を撮影可能に設計した電動アームを挿入して、副葬品と石室構造の実態を明らかにし、今後の保護対応のための資料収集に協力した。

文化遺産研究部の研究活動

当研究部は2006年4月に改組され、名称を「文化遺産研究部」から「文化遺産部」と改め、これまで3室であったものが4室体制に拡充された。歴史研究室、建造物研究室、景観研究室、遺跡整備研究室である。各室それぞれの研究テーマに基づく調査研究をおこなうとともに、文化的景観に関する調査研究については文化遺産部を中心とした奈良文化財研究所全体にわたるプロジェクトチームを作り調査研究に取り組んでいる。

●歴史研究室の調査と研究

歴史研究室では、世界文化遺産に登録されている寺社所蔵の書跡資料について、南都を中心として継続的な調査研究をおこなっている。さらに奈文研に寄贈された歴史資料についても調査研究をしている。

2006年度の諸寺社の調査は、興福寺・薬師寺・東大寺・唐招提寺・高山寺所蔵の書跡資料についておこな

った。興福寺調査は現在、従来把握されていなかった函について整理を進めている。2006年度は、第89函・第96函～第102函について、函番号をつけ、目録データをパソコンに入力し、一部は調書を作成した。近世寺院史料として興味深いものや、中世の経典などを把握できた。薬師寺は、箪笥である第29函と、第31函～第45函の調書作成をおこなった。写真は第24函を撮影している。また、薬師寺典籍文書データベースはデータを入力・修正すると共に、企画調整部文化財情報研究室がおこなったソフトの改善に協力し、その体裁を改めた。そして、第１函１号黒草紙・その紙背文書、第１函10号新黒双紙については影印・翻刻を作成し、『黒草紙・新黒双紙』として刊行した。中世薬師寺研究の基礎史料として活用できるものである。

東大寺は、東大寺図書館収蔵庫第４号室収蔵の新修東大寺文書聖教の調査を、科学研究費補助金も充当して実施した。主として中村準一寄贈文書を調査し、第15函の目録データをパソコンに入力し、一部写真撮影をおこなった。江戸時代後期から明治初年にかけての興福寺関係文書が多い。

唐招提寺所蔵資料については、惣倉所在の近代書類の調査を実施した。また、高山寺の調査を実施し、第309函・310函の調書作成・写真撮影をおこなった。高山寺調査の成果は、高山寺典籍文書綜合調査団編集の目録に掲載すべく、現在準備を進めている。

また、奈文研所蔵の資料については、「関野貞日記」の翻刻作業を進めているところである。

その他、調査協力の依頼を受けて、滋賀県石山寺聖教調査や、京都市大覚寺文化財総合調査、文化庁依頼の醍醐寺聖教調査、奈良市教育委員会依頼の氷室神社大宮家文書調査などに協力した。そのうち大宮家文書に関しては、その調査成果の一部を「大宮家文書の原本調査から」と題する文章として、『奈良文化財研究所紀要2007』に掲載した。また、その文書目録は奈良市より、2006年度に『奈良市歴史資料調査報告書（23）』として刊行されるに至っている。

●建造物研究室の調査と研究

建造物研究室では現存建造物、古材、発掘遺構・遺物などの現物資料を中心に据えて歴史的建造物及び伝統的建造物群などの調査研究を進めている。

2006年度は受託研究として重文堀内家住宅（長野県塩尻市所在）と高知県中芸地区森林鉄道遺構（旧魚梁瀬森林鉄道）の調査研究を実施した。堀内家住宅は計９棟（うち主屋・表門は重文指定）の歴史的な建造物と庭園を残し、屋敷構えが整っている。本調査では以上の物件すべてについて詳細調査をおこない、あわせて地域の文化遺産との連関を視野に入れた管理活用計画を立案した。この中で、妻壁を厚板組積構造とした文庫蔵は、二重張り板壁間を小砂利で充填するといった全国的に見ても特異な構造を持っていることを確認した。調査成果は報告書に取り纏めた。

高知県中芸地区森林鉄道遺構調査は、近代化遺産として国指定を目指すための基礎的調査として2006年度、2007年度の２ヵ年計画で実施される予定である。本森林鉄道は明治44年に開設後、昭和38年の魚梁瀬ダム建設を契機に廃止されている。路線沿いの年度設定範囲踏査の中で、隧道・橋梁・橋脚跡など計13物件について調書作成・実測・写真撮影をおこない、ほかに県内図書館等所蔵の古地図・書籍・新聞等の資料収集などの文献調査をおこなった。この中で昭和８・20・33年段階の路線図を復原した。

以上のほか、鳥取県所在の国宝三仏寺奥院（投入堂）の塗装・飾金具に関する現地調査、島根県所在の出雲大社境外諸社殿の現地調査を実施し、成果を奈文研紀要2007等で発表した。なお、2006年度以前に実施した鳥取県近代和風建築総合調査（県事業）とベトナム・ドゥオンラム村集落保存対策調査の報告書を刊行した。

調査研究の一環として研究所保管資料に基づく建造物乾板写真目録、現状変更説明（本文編・図版編の各1冊）の刊行と、同乾板写真のデジタルデータ化を近年継続している。2006年度刊行物として乾板写真目録、現状変更説明の計３冊を刊行した。

古代建築の技術に関する再検証をテーマとした研究を2006年度に立ち上げた。2006年度は２階建構造の建築を中心に既往研究・建築資料等の資料収集・整理分析をおこない、２月に第１回目の研究集会を開催してその中間的成果を発表した。

このほかに、現在進行中の大極殿正殿復原工事に関し、金具を中心とした詳細意匠の検討や全国各地で実施されている文化財建造物等の修理事業（大阪府・願泉寺本堂、奈良県・談山神社十三重塔ほか）・遺跡整備事業（島根県・北新造院遺跡ほか）での修理・復原・整備等に関する援助・助言をおこなった。

●景観研究室の調査と研究

2004年５月の文化財保護法改正により、文化的景観が文化財として位置づけられるようになり、これに対応するため2006年４月に本研究室が設置された。文化的景観については、景観の分類・分析・評価など基礎的・理論的な研究と具体的な場所を対象にした調査研究を実施した。

前者では、文化庁がおこなう「採掘・製造、流通・往来および居住に関連する文化的景観の保護に関する調査研究」に係わる業務を企画競争を経て受託し、文化庁の業務に協力した。文化庁が表記の内容の文化的景観に関して全国の自治体に照会し、各自治体からのデータを約2000件集めた。それを景観研究室ではデータベース化して整理し、文化庁が設置した研究会に作成した資料を提出、二次調査対象を選定する作業に協力した。

後者では、2006年度からの５カ年計画の中で取り組む文化的景観の調査研究対象を四万十川流域とし、高知県内流域１市４町の調査をおこなった。そのうち、四万十市・梼原町については文化庁補助事業の調査が始まった。両調査とも当研究所が受託し、調査をおこなった。四万十市では、四万十川でおこなわれる伝統漁法の風景、洪水時には水面下に没することがある沈下橋の景観などの現地調査をおこなった。梼原町では、お遍路さんを茶で接待するための茶堂という四阿風仏堂、坂本龍馬らが脱藩するのに通ったという「脱藩の道」（梼原街道）、棚田オーナー制度発祥の地となった神在居の棚田、などの現地調査をおこなった。今後は、保存活用のための計画を策定する予定である。

古代庭園に関する研究では、５カ年計画全体で平安時代の庭園を対象にする。初年度である2006年度は研究の全体的な把握に主眼をおいた研究会を実施した。報告内容は、①平安時代庭園研究の現状、②平安時代庭園発掘調査の概要、③史料から見た平安京の庭園、④絵巻から見た平安時代の庭園、⑤平安時代庭園の植栽である。

高松塚古墳石室解体後の仮整備計画に関しては、「特別史跡高松塚古墳仮整備基本設計業務」を文化庁から受託し作成した。関係者の意見を聞きながら整備案５案を作成し、2006年７月19日のワーキング委員会に提示した。この検討を踏まえて７月24日の国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会に３案を提示、現在の保存施設を撤去し、墳丘を本来的な形に復元する方針を得た。その後、石室跡の埋め戻し方法、支保工の防錆仕様の検討等を経て、基本設計図書を作成した。

●遺跡整備研究室の調査と研究

遺跡整備研究室は2006年４月に改組されて発足した文化遺産部に新設された研究室で、研究員２名で構成されている。

本研究室では、前身となる遺跡研究室から遺跡整備に関する調査・研究を引き継ぐとともに、整備された遺跡の公開・活用に関する調査研究にも重点を置き、保存・整備計画段階から整備後におけるまでの遺跡の公開・活用に関する調査研究をおこなうことを主たる業務としている。

今年度は、第一に遺跡の活用面に関する調査研究として、学校教育や生涯教育面において遺跡がどのように活用されているかを探るため、情報収集を進めた。そして、11月には「遺跡の教育面に関する活用」をテーマとし、第１回遺跡整備・活用研究集会を開催した。

この研究集会では、遺跡現地や埋蔵文化財センターにおける体験学習などの取組み、学校教育現場における遺跡を素材とした教育活動、ＮＰＯによる啓発活動などの取組みについて報告をおこない、その成果や問題点について討議した。

第二には、遺跡の整備手法の一つとしておこなわれている遺構の露出展示に関する調査研究を進めている。今年度は、遺構の露出展示を伴う整備状況について、国指定史跡を対象とした調査をおこない、遺跡整備報告書等から、遺跡の概要、整備の概要、露出展示されている遺構の概要、展示施設の種別・構造・設備、保存処理内容、管理内容、各種図面・写真等についての情報を収集し、データベース化を開始した。

第三には、旧遺跡研究室から引き継いだ大規模遺跡の整備・活用・管理に関する調査研究として、収集した情報や調査・分析結果についての整理作業をおこない、公開に向けての準備を進めた。

このほかに、遺跡活用に関する研究の一環として景観研究室と共同で「宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会」を2007年２月に開催した。ソウル景福宮で守門将の交代儀式等を再現している韓国文化財保護財団の関係者を招き、儀礼や年中行事などの復原を踏まえた遺跡活用のあり方について検討した。

また、地方公共団体からの依頼により、各地で進められている遺跡の保存整備活用事業について、援助・助言をおこなっている。

埋蔵文化財センターの研究活動

埋蔵文化財センターの4研究室では、各研究室の調査・研究を計画的に実施していくとともに、国や地方公共団体等の求めに応じて、専門的な協力と助言をおこなっている。

●保存修復科学研究室の調査と研究

当研究室では、出土遺構及び遺物の公開・活用に資するための保存科学的研究ならびに保存修復に関する開発研究を進めている。本年度に取り組んだ内容を以下に概観する。

奈良文化財研究所都城発掘調査部がおこなった発掘調査によって出土した遺物の材質・構造調査を実施し、それらの保存処理をおこなった。

他機関との共同調査・研究では「寺福童遺跡4出土銅戈保存修理」(小郡市教育委員会)、「潤地頭給遺跡出土準構造船の保存科学的共同研究」(前原市教育委員会)の2件を実施した。

開発研究では、石造文化財の劣化診断のための打音試験装置の試作と基礎的データの収集、石造文化財の変形・破壊のモニタリングを目的としたアコースティックエミッション法の実用化、遺跡の地中における水分状態の調査技術として、自然電位測定法ならびに比抵抗測定法を導入および実用化をおこなった。また、土の水分含有率の変化に充分対応し、かつカビや蘚苔類の繁茂を防ぐことを目的に試作した有機珪酸エステルを用いた実地試験をおこない、その効果を確認した。標準資料および考古遺物のラマンスペクトルの収集およびキトラ古墳壁画の顔料分析への適用、考古遺物のX線CT撮影、オートラジオグラフィおよびX線CR撮影による基礎的なデータの収集、シンクロトロン顕微赤外分析法による出土絹繊維の埋蔵中の劣化について分析を進めた。超臨界溶媒乾燥法では強化含浸に用いる薬剤について検討をおこなった。

外部機関からの受託事業として、「島根県加茂岩倉遺跡出土品事前調査」(文化庁)、「島根県加茂岩倉遺跡出土品保存修理」(文化庁)、「妻木晩田遺跡土質遺構露出展示技法研究」(鳥取県教委)、「長野県千曲市社宮司遺跡出土の六角木幢保存修復委託事業」(長野県教委)、「クスノキ製刳り抜き井戸の真空凍結乾燥法による保存処理研究」(三重県教委)、「国宝唐招提寺金堂壁画顔料分析調査」(奈良県教委)を実施した。

国宝高松塚古墳壁画の恒久保存対策の一環としておこなわれる石室解体に関して、石室の石材に関する岩石学および力学的調査、石室解体のための石室構造に関する予備調査ならびに石室解体に係る検証をおこなった。

また、本年度の保存科学研究集会は、国際会議として日中韓による「東アジア保存修復国際会議専門家会議」を開催した。

●環境考古学研究室の調査と研究

環境考古学研究室の活動は、環境考古学、動物考古学などの研修を実施することと、国内外の遺跡の発掘の指導と助言、そして出土した動物遺存体の同定、およびその分析が主である。また、京都大学大学院人間・環境学研究科において、環境考古学、動物考古学の講座を維持し、志望する学生の指導をおこなっている。

現在、大分市横尾遺跡(縄文)、佐賀市東名遺跡群(縄文)、石川県能登市真脇遺跡(縄文)、富山県小矢部市桜町遺跡(縄文)、長崎県壱岐原の辻遺跡(弥生)などの発掘指導から報告書の制作に参加し、福岡市史編纂事業では、博多の歴史の記述にも関わっている。国外では韓国慶南考古学研究所の依頼により、紀元前1世紀から3世紀にかけて形成された金海会峴里貝塚の発掘指導をおこない、現在は発掘調査報告書の作成の指導、協力をおこなっている。また、中国浙江省考古文物研究所による田螺山遺跡(新石器時代初期、河姆渡文化)の発掘にも参加し、動物遺存体研究の指導、助言をおこなっている。その成果の一例として、韓国金海会峴里貝塚の発掘では、紀元前1世紀からすでに牛馬が普及していたことを確認し、朝鮮海峡、対馬海峡を隔てた、倭の地には牛馬なし、という魏志倭人伝の記載が正しかったかどうかを、長崎県壱岐原の辻遺跡をはじめとする日本列島での出土例を再検討し、弥生時代に果たして牛馬が存在しなかったのかを検討したい。

研究室内での活動は、主に現生動物の骨格標本の作

製や、各時代の骨角器の製作技法の解明が主となっている。これまでに完全なもので貝類300個体、魚類1200個体、鳥類300個体、両生・爬虫類30個体、哺乳類160個体を製作し、主要な動物種を揃え、外部の研究者にも公開している。さらに『動物骨格図譜』を埋文ニュースに連載し、現在、単行本として刊行するため編集を進めている。動物骨に残る傷跡から利器を推定する研究も継続し、さまざまな電子工学機器を活用し、これまでの石器、金属器の導入や普及に関する研究成果とは違って、すでに縄文時代晩期に金属器が存在していたという新たな歴史像を提起しつつある。

●年代学研究室の調査と研究

考古学関連では、7県下10遺跡から出土した木材試料の年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、平城第404次調査で出土した西大寺食堂院井戸枠の年輪年代調査である。井戸を構成していた全20点の井戸枠部材のうち年輪年代調査の可能な16点について、デジタルカメラによる年輪画像から年輪幅を画像計測する方法で調査を実施した。うち15点から年輪年代が得られ、最新の年輪年代は767年であった。767年の年輪年代が得られた試料3点は、いずれも樹皮型であり、1点は樹皮を、2点は面皮を残存していた。したがって、得られた年輪年代は、用材の伐採年代を正確に示している。『続日本紀』によると、この年に造西大寺司が任命されており、西大寺造営史を考究するうえでの貴重な情報が、考古学・文献史学・年輪年代学共同での調査成果として得られた。

建築史関連では、国宝6棟、重要文化財1棟を含む7府県下9棟の建造物の年輪年代調査を実施した。

美術史関連では、国宝8点を含む6府県下の17躯の木彫像ならびに2点の工芸品に対して、年輪年代調査を実施した。特筆すべきは、興福寺の国宝板彫十二神将像の年輪年代調査である。デジタルカメラを用いた年輪画像計測の技術により、対象物に接触することなく6躯から年輪データを取得し、うち3躯の年輪年代が確定した。波夷羅大将像からは、辺材部を欠くものの965年の年輪年代が得られ、これは造像の上限年代を示している。また、真達羅大将像と伐折羅大将像は、年輪パターンの類似性により同じ原木から造像されたものであることが確認された。興福寺板彫十二神将像の造像時期に関しては、従来11世紀半ばを降らないとする見解が美術史の視点から示されてきたが、切削によって失われてしまった辺材部の存在を考慮しても今回の年輪年代調査の結果はこれと矛盾せず、上記の見解が科学的な調査によって裏付けられたことになる。

自然災害史関連では、長野県の遠山川埋没林から収集した試料に対して、年輪年代調査を実施した。

新しい年輪計測技術の開発研究では、マイクロフォーカスX線CT装置を用いた非破壊による年輪年代測定技術について、研究を重ねた。この技術が、日本での年輪年代学研究の主要樹種であるスギやヒノキなどに有効であることはこれまでの研究によって明らかにされてきたが、今年度の研究によって、針葉樹のみならず広葉樹に対しても有効であることが明らかになった。環孔材であるミズナラ、散孔材であるブナについての研究成果は、学術誌『Dendrochronologia』に原著論文として公刊され、とりわけヨーロッパの年輪年代学研究者からたいへん注目されている。

●遺跡・調査技術研究室の調査と研究

遺跡・調査技術研究室は、2006年4月の機構改編により、遺跡およびその調査法の研究と文化財の調査技術の開発・応用を主要な業務とする研究室として再出発した。過去に存在した集落遺跡、測量、発掘技術、遺跡調査技術、遺物調査技術の各研究室の伝統と蓄積を継承した研究の推進を目的としている。

本年度は、遺跡およびその調査法の領域では、前年度にひきつづき、古代の官衙関連遺跡と豪族居宅遺跡の資料を収集整理し、遺跡の性格を認定するための指標や、発掘調査で抽出すべき基本的属性についての研究をおこなった。収集した資料はデータベース化し、遺跡の性格や所在地、文献目録、おもな遺構と遺物、建物の詳細データと、地図や遺跡全体図、建物図面などの画像データを、奈良文化財研究所のホームページ上で順次公開しつつある。また、郡衙および周辺の関連寺院についての研究を進め、報告書を刊行したほか、「古代地方豪族居宅の構造と機能」のテーマで研究集会を開催した。さらに、文化庁の委託を受けて『発掘調査のてびき』の作成作業にもあたっている。

一方、文化財の調査技術の領域では、既存機器の整備と更新を進めつつ、測量、計測、探査を中心に活動をおこなった。測量分野では、国内外の研究者に対する平城宮での研修のほか、ベトナムのタンロン皇城で

現地研究者への実地研修を実施した。また、ＧＰＳの精度比較とハンディＧＰＳの応用に関する検討をおこなった。計測分野では、デジタル写真計測と三次元レーザスキャナの両手法に対する検討を経て、機材の導入と試験的な運用をおこなった。デジタル写真計測は、遺跡における簡便な情報取得手段として、広い範囲での応用が期待できる。なお、遼寧省文物考古研究所との共同研究では、この両手法を用いた墳墓出土遺物の三次元計測を実施している。また、探査分野では、平城宮のほか、地方公共団体と連携・共同して、地中レーダ探査、電気探査、磁気探査を日本各地でおこなった。これらの調査技術は、いずれも文化財の詳細かつ多様な情報取得手段として重要であり、より効率的な作業と分析方法の確立が望まれる。今後、実際の調査過程への導入を視野に入れつつ、関係機関等と連携して研究を進めていきたい。

国際学術交流

奈良文化財研究所では、現在、中国、韓国、カンボジアの３ヵ国の研究機関と以下の項目に述べるような学術共同研究を実施している。このほか、アフガニスタンとイラクを対象とする西アジア諸国等文化遺産保存修復協力事業や2006年６月に発足した文化遺産国際協力コンソーシアム（事務局は東京文化財研究所に設置）のおこなう支援協力事業にも協力している。2006年度の各事業の概要は以下の通りである。

●中国社会科学院考古研究所との共同研究

2001年度から５ヵ年にわたって実施してきた、唐長安城大明宮太液池遺跡の共同発掘調査は昨年度で終了した。2005年度発掘調査の概要については『奈良文化財研究所紀要2006』に発表するとともに、2006年の５月から12月にかけて、平城宮跡資料館において写真パネル展を開催し、調査の成果を公表した。

本年度は、正式報告書作成にむけて出土遺物の調査研究をおこなった。2007年３月に計７名の人員を現地に派遣した。出土遺物は建物に使用された瓦磚類を中心に、宮廷の私生活で用いられた青磁、白磁などの磁器、三彩陶器などがある。そのほか、礎石や欄干などの石製建築部材や青銅製の飾り金具などが出土している。これらを詳細に観察し図面や写真などの記録をとり、今後の報告書編集にむけての基礎資料を作成した。なお、2006年11月に中国側の研究者４名を招聘して今後の調査研究について協議をおこなった。

次期共同研究項目である漢魏洛陽城については、中国側の都合により、本年度７月に再度、国家文物局に申請をおこなったが、現在許可待ちの状態である。そこで、調査前の準備として洛陽城付近の衛星写真を購入し、地形の把握、遺跡の残存状況の把握や地図作成に向けての基礎作業をおこなった。

●遼寧省文物考古研究所との共同研究

2005年度で終了した「３－６世紀日中古代遺跡出土遺物の比較研究」を継承する形で、2006年度からの５年間は、新たに「朝陽地区隋唐墓の整理と研究」に取り組むこととなった。遼寧省西部の朝陽地区では、これまでに200基あまりの隋唐代の墓が発掘調査され、陶俑・陶磁器・土器・金属製品など膨大な副葬品が出土しており、未だ整理されていない遺物も多い。この研究ではこれらの遺物を整理し、比較研究をおこない、最終年にその成果を刊行することにしている。

2006年度は、９月に４名、10月に１名の研究員を招聘し、関連する遺跡・遺物の共同調査を実施するとともに、９月には招聘研究員に研究発表をして頂いた。これに対し、11月には６名、３月には５名の研究員を派遣して、蔡須達墓・蔡澤墓・黄河路唐墓・機械廠墓など24基の唐墓出土遺物について、観察・調書作成・実測・写真撮影をおこなった。また、実測に当たっては、従来の手計りによるほか、複雑な形状を呈する陶俑などについては、非接触３次元デジタイザを用い、遺物の３次元デジタルデータを直接コンピュータに取り込む方法を試み、かなりの成果を上げた。

●河南省文物考古研究所との共同研究

2000年度からの第Ⅰ期を承けた第Ⅱ期５カ年計画の２年目として、春と秋に鞏義市白河水地河地区において河南省文物考古研究所が主導する窯跡の発掘調査に研究員を併せて７名派遣した。発掘調査は700㎡。窯跡３基（漢代・北朝他）、廃棄物土坑38基、溝２条、竈跡１基などを検出し、800件に及ぶ遺物の出土をみるなど重要な考古学的新発見を得た。とりわけ、水地河地区Ⅲ区で発見した１号窯跡は北朝（北魏～隋代）の大規模な窯跡で

あり、大量の青釉瓷器と窯道具類が出土し、この地域で最も古い青瓷窯跡の発見となった。また、唐三彩の鉢、高杯、盤、碗などの失敗品を捨てた土坑を検出し、白河一帯においても唐三彩生産が行われていたことを明確にするとともに、唐三彩片中に日本の大安寺跡出土陶枕や縄生廃寺跡出土碗と酷似したものが含まれていることから、それらの製作地が黄冶窯であることが明確になった。秋には研究者５名を招聘し、関連遺物・遺跡の共同研究を行った。３月には研究者２名を派遣し、次年度の共同研究計画を協議した。なお、黄冶窯出土唐三彩片の蛍光Ｘ線分析などの成果を『華夏考古』誌上に公表した。

●韓国国立文化財研究所との共同研究

韓国国立文化財研究所とは「日本の古代都城並びに韓国古代王京の形成と発展に関する共同研究」というテーマで、2005年12月20日に日・韓共同研究合意書を取り交わした。2006年度は、それに基づき『日韓文化財論集１』（仮題）を作成するための調査、学術交流を主たる目的とした。

日本側からは、夏に３名、冬に５名の計８名が訪韓した。それぞれの研究テーマは、瓦、木簡、磨崖塔、都城制、遺跡の保存・活用など多岐にわたり、テーマに沿って韓国各地での調査を実施した。また韓国側からも秋に２名、冬に６名の計８名が訪日し、奈良を中心とした日本各地の都城関連遺跡や庭園の踏査、生産関連資料の調査をおこなった。以上の調査成果に基づき、2007年度に論集を刊行する計画である。

一方、国立慶州文化財研究所との間では、2006年５月17日に発掘調査交流協約書を取り交わした。それに基づき、日本側からは都城発掘調査部考古第二研究室の小田裕樹研究員が2006年９月18日～11月17日まで慶州文化財研究所に派遣され、慶州四天王寺址や隍城洞遺跡の発掘調査に参加し、あわせて韓国各地の都城関連遺跡の視察をおこなった。韓国側からも朴允貞学芸研究官が2007年１月22日～３月17日までの約２カ月間、奈良文化財研究所に滞在し、甘樫丘東麓遺跡、石神遺跡などの発掘調査に参加し、あわせて近畿圏とその周辺の都城関連遺跡の視察をおこなった。

●西アジア文化遺産保存修復のための緊急協力事業

アフガニスタン、イラクを対象とする文化遺産保存修復協力事業であり、東京文化財研究所と共同で実施している。

アフガニスタンに対しては、世界遺産バーミヤーン仏教遺跡群の保存修復協力と現地スタッフの養成のための研修事業を実施している。2006年度の研修事業は、現地に各地の研究者を招聘しておこなった。バーミヤーン遺跡の保護事業は、遺跡の範囲確認に重点を置き、本年度も遺構の広がりを把握するために、西大仏の南西にあたる平地部分で試掘調査を実施した。また、昨年度の試掘成果をもとに、大崖中央部前面の調査では建物基礎と考えられる遺構の広がり追及した。塔跡の調査では、基礎の外装を初めて確認するとともに、イスラーム時代の建物も発掘した。

イラクに対する緊急援助事業は、本年度も現地の専門家４名を日本に招聘して実施し、奈良文化財研究所では、主に出土金属器の保存処理についての研修をおこなった。

●異なる環境条件下における不動産文化財の発掘技術及び保存に関する調査研究

平成14年度の覚書調印によって、アンコール・トム内の西トップ寺院を対象とした４カ年計画が発足し平成17年度で第一フェイズの調査を終了した。今年度以降、第二フェイズとして新たな調査をおこなうため、覚書の調印をおこなうとともに、２回の現地調査と、招聘事業をおこなった。

現地調査は８月と１月に実施した。８月はこれまでおこなった中央祠堂前面にのびるテラスを南北に縦断するトレンチの最後として、北端に調査区を設定した。また１月の調査ではテラスの東側全面に調査区を設定し、下層のラテライト構造物や、中央のセマ（結界石）を発見した。今年度から建築関係の調査が始まり、８月には西トップ寺院の現状調査をおこなうとともに、１月には基壇の砂岩の実測調査をおこなうことができた。

招聘事業では３月に王立芸術大学を卒業した若手研究者３名を招聘し、研究所の視察や、奈良・京都の世界遺産の視察をおこなった。

また、今年度も科学研究費補助金の特定領域「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」に協力するとともに、昨年度より始まった大阪大谷大学の窯跡調査への協力をおこなった。

海外からの主要訪問者一覧

●辛　龍飛（国立慶州博物館）／大韓民国／06.3.28～4.27／金属遺物の科学的な保存処理及び分析法研修受講

●Simadri Bihari Ota（考古学調査局・フィールド・オフィサー）／インド／06.4.5／施設見学（国際交流基金文化人短期招聘）

●金　鐘祐（国立慶州博物館保存科学室）外5名／大韓民国／06.4.21／施設見学

●晋　宏逵（故宮博物院・副院長）外古建築保存専門家5名／中華人民共和国／06.5.15／現場視察・研究員との意見交換

●Vasaut Shinde（Deemd大学Deccan校考古学部・教授）／インド／06.5.30／発掘法の視察

●卓　然（大韓佛教曹溪宗務院・文化部長）外２名／大韓民国／06.6.20／文化財管理事例調査

●アネック・シハマート（タイ芸術局・第３地区長）／タイ王国／06.7.3／施設史跡視察

●田　庸昊（広州大学校）外1名／大韓民国／06.8.18／資料視察

●Roland Merar（Ministry of Community and Cultural Affairs, Republic of Palau Bureau of Arts and Culture Director／Historical Preservation Officer）外１名／パラオ共和国／06.8.17～9.15／文化遺産の保護に資する研修2006（ACCU個人研修・パラオ）（講師:松井・西口・神野・金井・小池・高瀬・中島）受講

●朴　景子（韓国伝統景観保存研究院長）外2名／大韓民国／06.9.6／事例調査

●宋　新潮（中国国家文物局博物館司長）外5名／中華人民共和国／06.9.11／施設・史跡視察

●TECH SRUN（Apsara Authority／Technical Staff in Preventive excavation Team, Archaeological Unit）外14名／カンボジア王国,インド,インドネシア共和国,イラン・イスラム共和国,マレーシア,モルディヴ共和国,ミクロネシア連邦,モンゴル国,ネパール王国,ニュー・ジーランド,パキスタン・イスラム共和国,大韓民国,サモア独立国,トルクメニスタン,ベトナム社会主義共和国（計15カ国）／06.9.19～9.25, 10.2,10.3／ACCU奈良2006集団研修〔講義（講師）：年輪年代法（光谷）・考古遺物の整理実習（西口・神野・今井）・環境考古学（松井）・平城宮臨地講義（高瀬・中島）〕受講

●精華大学文化遺産保護研究所・研究者13名／中華人民共和国／06.9.26／施設・史跡見学

●エルナンデス・アギラル・ルイス・フェデリコ（国家文化芸術審議会・総裁）／エルサルバドル共和国／06.9.26／施設視察

●ウーフイムン（外務省第一アジア局・次長）外6名／ベトナム社会主義共和国／06.10.7／ベトナム首相訪日先遣隊史跡視察

●グエン・タン・ズン（首相）外多数／ベトナム社会主義共和国／06.10.22／ベトナム首相訪日史跡視察

●ブイチミンチャウ（文化情報省）外1名／ベトナム社会主義共和国／06.10.24／奈文研表敬訪問

●スレイヤー・A・アジーズ（国立博物館中央修復研究室）外3名／イラク共和国／06.11.6～12.4／ユネスコ・日本信託基金イラク博物館における修復研究室復興プロジェクト［講義:保存科学（脇谷 外）］受講

●チャン・ディン・タイン（Ministry of Culture and Information, Department of Culrural Heritage, Division of Relic and Monuments Management, Expert）外1名／ベトナム社会主義共和国／06.11.7,11.20～12.1／文化遺産の保護に資する研修2006（ACCU個人研修・ベトナム）」［講義（講師）：金属保存修復概論・実習（脇谷）奈文研施設外見学（井上和・脇谷）］受講

●韓中日文化遺産比較研究会（大韓民国文化財庁研究官・行政官有志）会員14名／大韓民国／06.11.3～11.6施設・史跡視察

●ADI Bin Haji Taha（マレーシア国立博物館長）／マレーシア／06.11.28／施設・史跡視察

●王　魏（中国社会科学院考古研究所長）／中華人民共和国／06.11.30／共同研究事業に関する協議

●リビア考古学庁考古学局長 外2名／社会主義人民リビア・アラブ国／06.12.4／文化財保護に関する研究内容・方法について

●禹　景準（文化財庁文化財政策局文化財活用課・書記官）／大韓民国／07.1.20／史跡視察

●金　旭東（吉林省文物考古研究所長）外1名／中華人民共和国／07.1.26／施設・史跡見学

●アミール・モヘッビアン（イスラム・イラン新思想党首）／イラン・イスラム共和国／07.2.17／史跡視察

●李　衛（陝西省西安文物保護修復センター）外1名／中華人民共和国／07.2.20／史跡視察及び意見交換

●常　一民（太原市文物考古研究所・副所長）／中華人民共和国／07.2.27,2.28／史跡見学

●Mohammad Shariatmadari（外交関係戦略評議会メンバー・前商業大臣）外4名／イラン・イスラム共和国／07.3.16／施設・史跡視察

●王　旭東（敦煌研究院・副院長）外3名／中華人民共和国／07.3.19／施設見学及び意見交換

海外からの招聘者一覧

●尹　根一（国立慶州文化財研究所長）／大韓民国／06.5.16～5.19

●權　宅章（国立慶州文化財研究所・学芸研究士）／大韓民国／06.5.16～5.19

●Pheng Sytha（プノンペン芸術大学・考古学部長）／カンボジア王国／06.8.16～8.23

●chhay Rachna（アプサラ・研究員）／カンボジア王国／06.8.16 ～8.24

●李　久海（揚州市文物考古研究所長）／中華人民共和国／06.9.11～9.20

●朱　岩石（中国社会科学院考古研究所漢唐研究室・副主任）／中華人民共和国／06.9.12～9.19

●田　立坤（遼寧省文物考古研究所・書記）／中華人民共和国／06.9.16～9.27

●李　龍彬（遼寧省文物考古研究所・金牛山工作站責任者）／中華人民共和国／06.9.16～9.27

●許　紅英（遼寧省文化庁文物処長）／中華人民共和国／06.9.16～9.27

●李　振勇（遼寧省朝陽市文化局・副局長）／中華人民共和国／06.9.16～9.27

●解　小敏（大鐘寺古鐘博物館・副研究館員）／中華人民共和国／06.9.18～9.24

●邓　德才（大鐘寺古鐘博物館・助理館員）／中華人民共和国／06.9.18～9.24

●庄　岩（大鐘寺古鐘博物館・館員）／中華人民共和国／ 06.9.18～9.24

●于　弢（大鐘寺古鐘博物館・副研究館員）／中華人民共和国／06.9.18～9.24

●庾　华（大鐘寺古鐘博物館・副研究館員）／中華人民共和国／06.9.18～9.24

●王　功杰（大鐘寺古鐘博物館・助理館員）／中華人民共和国／06.9.18～9.24

●韓　京淳（韓国建国大学校絵画学科絵画保存・助教授）／大韓民国／06.9.22 ～9.26

●金　思悳（国立文化財研究所保存科学研究室・研究員）／大韓民国／06.9.22～9.26

●金　壽起（韓国龍仁大学校文化財保存学科・教授 ）／大韓民国／06.9.22～9.26

●金　奎虎（公州大学校・教授）／大韓民国／06.9.22～9.26
●鄭　永東（国立慶州文化財研究所保存科学室・研究員）／大韓民国／06.9.22～9.26
●李　午憙（韓国伝統文化学校保存科学科・碩座教授）／大韓民国／06.9.22～9.26
●李　壽熙（韓国伝統文化学校附設韓国伝統文化研究所・研究員）／大韓民国／06.9.22～9.26
●陸　壽麟（故宮博物院科技部・研究員）／中華人民共和国／06.9.22～9.27
●梁　泌承（ソウル歴史博物館・保存處理課長）／大韓民国／06.9.22～9.26
●姜　炯台（国立中央博物館・保存科学室長）／大韓民国／06.9.22～9.26
●魏　光徹（韓瑞大学校文化財保存学科・教授）／大韓民国／06.9.22～9.26
●陳　青（中国文物研究所文物保護科技中心・主任）／中華人民共和国／06.9.22～9.26
●杜　暁帆（ユネスコ北京事務所・文化遺産保護委員）／中華人民共和国／06.9.22～9.26
●秦　文生（河南省文物考古研究所・副所長）／中華人民共和国／06.10.11～10.24
●朱　庆伟（河南省文物考古研究所・科長）／中華人民共和国／06.10.11～10.24
●马　新民（河南省文物考古研究所・館員）／中華人民共和国／06.10.11～10.24
●黄　克映（河南省文物考古研究所・館員）／中華人民共和国／06.10.11～10.24
●刘　岩（河南省文物管理局・主任科員）／中華人民共和国／06.10.11～10.24
●王　晶辰（遼寧省文物考古研究所長）／中華人民共和国／06.10.15～10.24
●車　順喆（国立慶州文化財研究所・学芸研究士）／大韓民国／06.10.30～11.7
●朴　玧貞（国立慶州文化財研究所・学芸研究士）／大韓民国／06.10.30～11.7
●劉　慶柱（中国社会科学院学部委員考古研究所・教授）／中華人民共和国／06.11.10～11.15
●李　毓芳（中国社会科学院考古研究所・研究員）／中華人民共和国／06.11.10～11.15
●白　雲翔（中国社会科学院考古研究所・副所長・教授）／中華人民共和国／06.11.10～11.15
●銭　国祥（中国社会科学院考古研究所・研究員）／中華人民共和国／06.11.10～11.15
●朴　充貞（国立慶州文化財研究所・学芸研究士）／大韓民国／07.1.22～3.17
●卓　京柏（国立扶余文化財研究所学芸研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.2.5～2.11
●金　哲主（国立扶余文化財研究所学芸研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.2.5～2.11
●姜　賢（国立文化財研究所建築物研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.2.5～2.11
●南　昌根（国立文化財研究所建造物研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.2.5～2.11
●黄　仁鎬（国立文化財研究所遺跡調査研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.3.5～3.13
●田　庸昊（国立扶余文化財研究所学芸研究室・学芸研究官）／大韓民国／07.3.5～3.13
●Phann Makara（プノンペン王立芸術大学卒業生）／カンボジア王国／07.3.19～3.31
●Pen Vuthyda（プノンペン王立芸術大学卒業生）カンボジア王国／07.3.19～3.31
●Than Monoyith（プノンペン王立芸術大学卒業生）カンボジア王国／07.3.19～3.31

奈文研研究者の海外渡航一覧

●森本　晋：アメリカ合衆国／06.4.18～4.26／考古学におけるコンピュータの応用と数量的方法学会に出席・発表／運営費交付金
●窪寺　茂：大韓民国／06.4.26～5.1／韓国皇龍寺復原に関する国際会議に出席／先方負担
●崔　ゴウン：大韓民国／06.4.26～5.2／韓国皇龍寺復原に関する国際会議に出席／特別研究員奨励費
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／06.5.18～5.21／ベトナム国ドンラム村保存にかかる現地打合せ等／他機関科研費
●巽　淳一郎：中華人民共和国／06.5.19～5.24／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●西口　壽生：中華人民共和国／06.5.19～5.24／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●玉田　芳英：中華人民共和国／06.5.19～5.24／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●森川　実：中華人民共和国／06.5.19～5.24／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●深澤　芳樹：大韓民国／06.5.29～6.3／東アジアにおける弥生時代タタキ技法波及経路の研究のため／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／06.6.2～6.8／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア王国／06.6.3～6.7／アンコール歴史遺産保護開発国際調整委員会技術委員会に出席・発表のため／運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／06.6.10～6.14／遼寧省文物考古研究所との共同研究打合せ／運営費交付金
●光谷　拓実：中華人民共和国／06.6.11～6.18／第7回国際年輪学会参加及び発表のため／運営費交付金
●大河内　隆之：中華人民共和国／06.6.11～6.25／第7回国際年輪学会参加及び発表のため／運営費交付金
●松井　章：北部アイルランド連合王国／06.6.13～6.21／シェットランドにおける在来家畜、および先史文化の研究／科研費
●森本　晋：リトアニア共和国／06.7.6～7.21／第30回世界遺産委員会出席／他機関負担
●加藤　真二：中華人民共和国／06.7.9～7.16／中国吉林省における研究発表と遺跡・遺物調査／科研費
●窪寺　茂：中華人民共和国／06.7.17～7.21／中国・大明宮丹鳳門復元に関する研究／先方負担
●杉山　洋：カンボジア王国／06.7.17～7.24／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究に関する現地調査のため／科研費
●清永　洋平：インドネシア共和国／06.7.20～7.27／世界遺産プランバナン寺院遺跡群地震被害調査／他機関負担
●豊島　直博：カンボジア王国／06.8.5～8.12／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため／運営費交付金
●窪寺　茂：カンボジア王国／06.8.5～8.12／アンコール文化遺産保護共同研究事業 カンボジア西トップ寺院の建築学的調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／06.8.5～8.12／アンコール文化遺産保護共同研究事業 カンボジア西トップ寺院の建築学的調査／運営費交付金
●小澤　毅：中華人民共和国／06.8.6～8.15／終南山・嵩山・泰山の踏査／他機関科研費
●清水　重敦：大韓民国／06.8.7～8.12／日韓文化財共同調査のため／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●内田　和伸：大韓民国／06.8.7～8.13／日韓文化財共同調査のため／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●粟野　隆：大韓民国　／06.8.7～8.13／日韓文化財共同調査のため／渡航費：運営費交

付金,滞在費：先方負担
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／06.8.9～8.15／開発著しいハノイ都市圏における近郊農村・下町・新住宅地の町づくりの研究にかかる現地ワークショップの開催／他機関科研費
●今井　晃樹：中華人民共和国／06.8.13～8.26／北魏時代の平城と雲岡の調査／他機関科研費
●岡村　道雄：中華人民共和国／06.8.19～8.26／是川遺跡ジャパンロード調査／他機関負担
●松井　章：中華人民共和国／06.8.31～9.6／田螺山遺跡出土遺物の調査、環境考古学研究に関する資料調査／他機関科研費
●市　大樹：中華人民共和国／06.9.6～9.16／高句麗・渤海等の古代遺跡の調査／他機関科研費
●内田　和伸：中華人民共和国／06.9.6～9.16／中国東北地方の古代庭園関係遺跡調査／他機関科研費
●深澤　芳樹：大韓民国／06.9.11～9.14／東アジアにおける弥生時代タタキ技法波及経路の研究のため／科研費
●森本　晋：アフガニスタン・イスラム国／06.9.10～10.13／バーミヤン遺跡現地調査／運営費交付金
●石村　智：アフガニスタン・イスラム国／06.9.10～10.13／バーミヤン遺跡現地調査／運営費交付金
●脇谷　草一郎：アフガニスタン・イスラム国／06.9.10～10.6／バーミヤン遺跡現地調査／運営費交付金
●窪寺　茂：アフガニスタン・イスラム国／06.9.14～10.13／バーミヤン遺跡現地調査／他機関負担
●吉川　聡：大韓民国／06.9.17～9.22／韓国の古文書の料紙調査／他機関科研費
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／06.9.18～9.26／ベトナム・タンロン遺跡に係わる日越専門委員会準備会合に出席のため／他機関負担
●小田　裕樹：大韓民国／06.9.19～11.18／国立慶州文化財研究所との共同研究（発掘調査交流）のため／渡航費：運営費交付金,滞在費:先方負担
●井上　和人：アフガニスタン・イスラム国／06.9.28～10.13／バーミヤン遺跡現地調査／運営費交付金
●加藤　真二：中華人民共和国／06.10.19～10.26／遼代文化財展示の充実に関する調査研究／運営費交付金
●小澤　毅：大韓民国／06.10.23～10.29／ソウル地域出土瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●林　正憲：大韓民国／06.10.23～11.1／ソウル地域出土瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●山崎　信二：大韓民国／06.10.23～11.1／ソウル地域出土瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●森本　晋：キプロス共和国／06.10.29～11.6／国際会議CIPA/VAST2006に出席／運営費交付金
●小澤　毅：大韓民国／06.11.1～11.9／飛鳥の宮都景観の形成における韓国王京の影響の調査／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●箱崎　和久：大韓民国／06.11.1～11.9／慶州南山塔谷の磨崖塔についての建築的研究／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●市　大樹：大韓民国／06.11.1～11.9／日韓における木簡の比較研究／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●金田　明大：中華人民共和国／06.11.8～11.15／日中古代墳墓副葬品の比較研究に係る資料収集及び調査研究／科研費
●牛嶋　茂：中華人民共和国／06.11.8～11.18／日中古代墳墓副葬品の比較研究に係る資料収集及び調査研究／科研費
●小池　伸彦：中華人民共和国／06.11.8～11.18／日中古代墳墓副葬品の比較研究に係る資料収集及び調査研究／科研費
●豊島　直博：中華人民共和国／06.11.8～11.18／日中古代墳墓副葬品の比較研究に係る資料収集及び調査研究／科研費
●松村　恵司：大韓民国／06.11.16～11.19／シンポジウム：百済の生産技術と政治社会に参加／先方負担
●松井　章：中華人民共和国／06.11.17～11.24／動物考古学関連資料収集、田螺山遺跡出土遺物の調査／他機関科研費
●石村　智：アメリカ合衆国／06.11.26～12.3／国際学会Archaeology of the Polynesian Homeland : a working conference on the prehistory of the Fiji-West Polynesia triandle（米領サモア・パゴパゴ市）に参加、ハワイにて資料調査（ビショップ博物館）／科研費
●山崎　信二：大韓民国／06.11.27～12.2／日韓合意書にもとづく論文作成のための瓦調査／渡航費:運営費交付金,滞在費:先方負担
●千田　剛道：大韓民国／06.11.27～12.2／日韓合意書にもとづく論文作成のための瓦調査／渡航費：運営費交付金,滞在費：先方負担
●次山　淳：大韓民国／06.12.5～12.7／「日韓出土土器による3,4世紀国際交流の研究」に関わる資料収集のため／科研費
●杉山　洋：カンボジア王国／06.12.7～12.16／アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため／運営費交付金
●巽　淳一郎：中華人民共和国／06.12.8～12.14／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●西口　壽生：中華人民共和国／06.12.8～12.14／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●神野　恵：中華人民共和国／06.12.8～12.14／河南省文物考古研究所との共同研究／運営費交付金
●山崎　信二：中華人民共和国／06.12.12～12.22／中国南朝瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●小澤　毅：中華人民共和国／06.12.12～12.22／中国南朝瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●今井　晃樹：中華人民共和国／06.12.12～12.22／中国南朝瓦の調査（古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究の一環）／科研費
●森本　晋：ドイツ連邦共和国・フランス共和国／06.12.13～12.21／バーミヤン遺跡の保護に関する専門家作業グループ国際会議出席（ドイツ）,バーミヤン遺跡関連資料の調査（フランス）／他機関負担
●松井　章：大韓民国／06.12.18～12.23／韓国金海貝塚の発掘報告書作成指導・研究打合せ／運営費交付金
●井上　和人：ベトナム社会主義共和国／07.1.1～1.22／タンロン遺跡発掘調査支援／他機関負担
●小澤　毅：ベトナム社会主義共和国／07.1.6～1.13／タンロン遺跡発掘調査支援／他機関負担
●金田　明大：ベトナム社会主義共和国／07.1.15～1.22／タンロン遺跡発掘調査支援

／他機関負担
●高瀬　要一：大韓民国／07.1.18～1.21／慶州九黄洞園池復原整備指導／他機関負担
●島田　敏男：カンボジア王国／07.1.22～1.28／アンコール遺跡群の調査／運営費交付金
●清水　重敦：カンボジア王国／07.1.22～1.28／アンコール遺跡群の調査／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／07.1.22～2.3／カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究に関するシンポジウム出席／科研費
●和田　一之輔：カンボジア王国／07.1.24～2.3／アンコール遺跡群の調査／運営費交付金
●石村　智：カンボジア王国／07.1.24～2.3／アンコール遺跡群の調査／運営費交付金
●森本　晋：カンボジア王国／07.1.29～2.3／国際シンポジウム：新石器時代の初期居住とクメール陶器の生産に出席・司会／科研費
●神野　恵：台湾／07.1.30～2.2／黄治窯唐三彩資料の調査／科研費
●千田　剛道：大韓民国／07.2.20～2.26／出土建築部材に関する調査研究状況の類例調査／科研費
●金井　健：大韓民国／07.2.20～2.26／出土建築部材に関する調査研究状況の類例調査／科研費
●馬場　基：大韓民国／07.2.20～2.26／出土建築部材に関する調査研究状況の類例調査／科研費
●高田　貫太：大韓民国／07.2.20～2.26／出土建築部材に関する調査研究状況の類例調査／科研費
●豊島　直博：大韓民国／07.2.20～2.23／「弥生・古墳時代における日韓墳墓出土鉄製武器の比較研究」に関する資料調査／科研費
●石村　智：チリ共和国、仏領ポリネシア／07.2.24～3.5／イースター島・ソサエティ諸島の石造記念物調査／科研費
●今井　晃樹：中華人民共和国／07.2.25～3.1／歴史的庭園に関する情報・資料収集／運営費交付金
●中島　義晴：中華人民共和国／07.2.25～3.1／歴史的庭園に関する情報・資料収集／運営費交付金
●田辺　征夫：カンボジア王国／07.2.26～3.2／アンコール遺跡群現地視察／運営費交付金
●杉山　洋：カンボジア王国／07.2.26～3.2／アンコール遺跡群共同研究／運営費交付金
●清永　洋平：インドネシア共和国／07.3.2～3.7／インドネシアジャワ島中部地震による文化遺産被害第二次調査／他機関負担
●森川　実：中華人民共和国／07.3.5～3.17／大明宮太液池出土遺物の調査／運営費交付金
●今井　晃樹：中華人民共和国／07.3.5～3.23／太液池遺跡の調査／運営費交付金
●牛嶋　茂：中華人民共和国／07.3.5～3.23／太液池遺跡の調査／運営費交付金
●箱崎　和久：中華人民共和国／07.3.5～3.23／江蘇省における塔婆建築の構造と意匠に関する調査（～3/12）唐長安城太液池に関する建築石材と類例の調査（3/12～）／～3/12：科研費,3/12～：運営費交付金
●小林　謙一：中華人民共和国／07.3.10～3.14／東アジアにおける武器・武具の比較研究／科研費
●加藤　真二：中華人民共和国／07.3.10～3.14／遼寧省文物考古研究所との共同調査／運営費交付金
●中川　あや：中華人民共和国／07.3.10～3.17／遼寧省文物考古研究所との共同調査／運営費交付金
●和田　一之輔：中華人民共和国／07.3.10～3.17／遼寧省文物考古研究所との共同調査／運営費交付金
●金田　明大：中華人民共和国／07.3.10～3.17／遼寧省文物考古研究所との共同調査／運営費交付金
●西田　紀子：中華人民共和国／07.3.12～3.17／唐長安城太液池に関する建築石材と類例の調査／運営費交付金
●金井　健：中華人民共和国／07.3.12～3.23／遺物の調査と撮影／運営費交付金
●高瀬　要一：フィリピン共和国／07.3.14～3.21／文化的景観調査（コルディレラ山脈の棚田の保存管理と観光による景観破壊の実態調査）／運営費交付金
●松井　章：ロシア連邦／07.3.18～3.22／ロシア沿海州新石器時代遺跡出土動物骨の調査／科研費
●清水　重敦：中華人民共和国／07.3.18～3.23／中国における文化遺産のオーセンティシティに関する現地調査／科研費
●森本　晋：ベルギー王国／07.3.18～3.24／国際研究集会：遺産の未来 出席／運営費交付金
●島田　敏男：ベトナム社会主義共和国／07.3.19～3.22／ベトナム国ハノイ省ドンラム村に関する検討会等出席／他機関科研費
●西口　壽生：中華人民共和国／07.3.25～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究 2006年度総括及び、2007年度計画協議／運営費交付金
●神野　恵：中華人民共和国／07.3.25～3.28／河南省文物考古研究所との共同研究 2006年度総括及び、2007年度計画協議／運営費交付金

公開講演会

第98回公開講演会

2006年6月17日

◆今井 晃樹：唐代宮殿の風景

考古学の発掘調査は古代の宮殿の様子を明らかにするのに多大な貢献をしてきた。しかし、その成果は建物の規模や配置を示す平面図という形で発表されることがおおく、当時の具体的な風景を想像しにくい。この講演では当時の人々が感じた風景をできるだけ立体的に視覚的に想像できるようにした。会場では宮城内にあった宮殿建物の規模や形態を示す際に、それらを実感できるように身近にある現代の建物や町の風景と比較することにつとめた。

古代の宮殿というのは、儀礼の空間であり、視覚的な要素が重要な意味をもっていた。塀に囲まれた広場とその奥にそびえる高い建物は見る者を圧倒するように設計され、広場には樹木や水路などで空間を立体的に演出していた。宮殿の建物の規模、高さ、屋根や柱の色は人々の記憶にもっとも印象深くのこる視覚的要素である。宮殿空間でおこなう儀式ではさらなる演出がされていた。多数の儀仗兵、幡、楽団や舞踏団が広場を埋め尽くし、舞台装置が準備された。音をふくむ聴覚的要素が演出に加味された。

以上のように考古学だけではわかりにくい宮殿空間本来の風景や雰囲気を多少なりとも復原できたと考える。

◆金井 健：遺跡からの情報発信
ー遺跡保存のプロモーションとプレゼンテーションー

平城宮跡の保存と整備の変遷、また国内外の遺跡の整備・活用の事例を紹介しつつ、その意義と今後の方向性について発表した。

事例を概観する中で明らかになったのは、遺跡の整備・活用には常に遺跡に内包された情報をどのような手段で発信していくかが問われているということである。平城宮跡に蓄積された情報をどのように理解するのか、また、どのような情報を発信していくべきか、こうした問いかけが平城宮跡の整備・活用に課せられた根本的な課題である。

かつて、日本の遺跡が開発事業の過大な要求からハード面の整備・活用に大きく傾倒したように、整備・活用の実際が社会システムに深く関わっていることを忘れてはならない。近年、国内外の遺跡にみられる経営的視点の導入や社会化プログラムは、遺跡の整備・活用に社会システムを意識的に組み込む仕組みであり、平城宮跡の整備・活用にも積極的に取り入れていく必要があろう。

第99回公開講演会

2006年10月28日

◆西田 紀子：明治・大正・昭和の住まいと文化財

平成16・17年度に実施した鳥取県近代和風建築総合調査の成果を中心に、近代民家の変遷について実例を交えながら紹介した。近代の住宅については、これまで、西洋建築からの影響や建築家の設計による新様式の採用など、近代ならではの特徴をもつ住宅が注目されてきた。しかし、これらは日本全国に残る近代の住宅の一部に過ぎず、実際は、近世民家の平面や構造・意匠を継承したものが大半を占めていた。鳥取県にはこのような近代民家が多く現存し、その変遷からは、一部の富裕層や上層に限られていた様式が広い階層に普及していく過程をみることができる。近代の民家の変遷からは、規模が大型化し、座敷の意匠が充実、一階の裏側や二階の居住性が向上する過程をよみとれる。また、平面の拡大により、構造が強固となり、断面大の軸材や、洋風トラスの採用などが用いられた。このような近世民家の継承の上に花開いた近代民家は、明治中頃から後半にかけて一到達点に達したといえよう。

◆山本 崇：木簡調査の100年ー全国出土木簡の追跡からー

「木簡調査の100年」をテーマに、木簡の調査には100年に及ぶ歴史があることと、最新の釈読成果を紹介した。

平城宮跡出土の「１号木簡」（寺請木簡）以前に、全国で21件の木簡出土事例が知られており、最古の発見例は実に1904年にさかのぼる。また、奈文研の調査による最初の木簡も、最近は「出土した墨書のある木製品」をすべて「木簡」とみることから、1958年に飛鳥寺塔跡で出土した舎利容器の外箱となった。

全国の出土木簡は、2006年10月には34万点を超えた。こうした類例の増加に伴う調査研究の深化と、赤外線機器など技術の進歩により、出土当時には読めなかった文字が新たに読めるようになり、大きな成果をあげている。その１例が、姫路市の辻井遺跡でみつかった「難波津の歌」木簡である。1985年の出土当時には判読できなかったが、2004年になって下の句まで記した「難波津の歌」木簡の最初の出土例であったことが判明し、古代の畿内近国における文字文化受容の一端を示す資料を紹介することができた。

研究集会

◆東アジア文化財保存修復国際会議

2006年9月24～25日

日本、中国および韓国にはそれぞれ文化財の保存修復に携わる専門家が存在する。地理的にも文化的にも共通するものをもつ東アジア３カ国ではあるが、文化財に対する考え方、文化財をとりまく環境には国によっておのずから違いがあるため、その文化財の保存修復の考え方は必ずしも一致するものではない。しかしながら、気候風土や文化財の素材には類似したものも多く、共通の課題を抱えていることもまた事実である。

今回の国際会議では、口頭発表として日本８件、中国11件、韓国10件の計29件、ポスター発表として21件（全て日本）の発表件数となった。また、日本から133名、中国から19名、韓国から32名、ハンガリーおよびインドネシアから各１名の参加者を得、研究発表および総合討議を通して、お互いの考え方や技術についてその違いと共通性を認め合い、議論を深めていくことができた。

この国際会議は、2001年に北京でおこなわれた、中韓日文物保存修復技術検討会に引き続くものとして開催されたものであるが、総合討議において、「東アジア文化財保存修復学会（仮称）」の設立を目指し、各国に準備委員会を発足させ、相互の連絡調整をおこなっていくことが確認されたことは、大きな成果のひとつとしてあげることができる。

（高妻 洋成）

◆古代官衙・集落研究会

2006年12月15～16日

2006年度は「古代豪族居宅の構造と機能」をテーマに開催した。今回は、地方豪族居宅遺跡の主要な調査成果を整理するとともに、中央貴族邸宅や古墳時代の豪族居館、郡衙の館や国司館との対比をおこない、また、文献史学におけるイヘ・ヤケ論についても再検討も進め、考古学と文献史学との両分野から豪族居宅の構造や機能について追究し、現状における課題の共有化を図ることを目的とした。研究報告は、神保公久「九州の豪族居宅」、菅原祥夫「東北の豪族居宅」、田中広明「地方官衙の館と豪族居宅」、山中敏史「地方豪族居宅の空間的構成」、橋本博文「古墳時代豪族居宅分析からの提言」、家原圭太「京内貴族邸宅の構造」、仁藤敦史「貴族・地方豪族のイエとヤケ」の７本で、総合討議をおこなった。地方公共団体・大学関係者等147名が参加し討議をおこなった。アンケートでは９割以上の参加者から有意義であったとの回答を得た。

この研究会の報告論文集は、2007年12月刊行の予定である。

（山中 敏史）

◆第10回古代瓦研究会
飛鳥白鳳の瓦づくり－重弁蓮華紋軒丸瓦の展開－

2007年2月3日～4日

白鳳期の重弁蓮華紋軒丸瓦のうち、山背の樫原廃寺式の瓦、河内の原山廃寺式の瓦、近江の湖東式の瓦および備中の備中式の瓦について、年代・文様・技法・広がり及び中国・朝鮮からの影響について検討する研究会である。

樫原廃寺の瓦については、最古のものが７世紀中葉で、次の段階のものが７世紀後半で、全体として新羅との関係が指摘された。

高井田廃寺の瓦は、金堂・講堂・塔の順での生産が考えられ、原山廃寺式軒丸瓦は間弁T字形の系列と、間弁に珠文を配する系列に大別し、後者と側板連結模骨丸瓦との関係が議論された。瓦当文様における古新羅系・百済系・高句麗系要素の混在は、高井田廃寺周辺の渡来人の多様性に由来するものとの指摘があった。

湖東式の瓦については、従来百済との関係が指摘されていたが、湖東式の軒丸瓦に最も類似する現状での資料は、東魏・北斉の鄴城の瓦であり、粘土紐桶巻作りの比率が多いこと、瓦当裏面に刻みを入れて丸瓦と接合すること、瓦当文様の各要素が高句麗瓦との関係を考慮すべきであるとの指摘があった。

備中式の瓦については、備中式と淀江廃寺式との関係、大阪堂ヶ芝廃寺との関係が議論され、側板連結模骨丸瓦の存在が指摘された。参加人数176名であった。

（山崎 信二）

◆宮中儀礼の復興による文化遺産の活用に関する研究会

2007年2月22日

文化遺産部景観研究室・遺跡整備研究室共同開催

第一次大極殿復元完了後の活用を念頭に置いた研究会で、景観研究室・遺跡整備研究室共同開催である。ソウルの景福宮などで守門将の交代儀式や大射の礼、宮中の舞踊等の復興に関わる韓国の研究者二人を招き、現状と課題について報告があった。また、平城遷都1300年記念事業協会から事業概要の現状報告があった。さらに、平城宮で騎射はどこでおこなわれ、復興プログラムはどのようなものが考えられるか報告があり、流鏑馬等をおこなっている小笠原流弓馬術礼法小笠原教場の小笠原清基氏から実際におこなう場合の注意点など有意義なコメントを得た。報告は以下の４本。安泰旭「朝鮮時代の宮中儀礼の復元、再現の現況と課題」、金英淑「朝鮮王朝宮中呈才の復元、再現の現況と課題」、立石堅志「平城遷都1300年記念事業の概要について」、芳之内圭・内田和伸「五月五日節会の復興に関する基礎的研究」。

（内田 和伸）

◆古代建築の技術研究会

2007年2月23日

建造物研究室では、平城宮第一次大極殿復原研究にともない蓄積された古代建築の構造・技法・意匠の研究を元に、2006年度からの中期計画において、古代における建築構法の研究を掲げている。この研究内容を討議し、さらに広く研究者一般に意見を求める機会として、標記研究会を立ち上げることとした。奈文研建造物関係研究員に加え、研究協力者として所外の研究者18名からなる研究グループを組織し、年に２回の研究会を、１回目は上記グループによる検討会、２回目は公開の研究集会という形で実施する予定である。2006年度は、第１回研究会であるため、研究グループの検討会として、研究の全体像を討議し、その上で研究事例として清水重敦、山下秀樹による「飛鳥・白鳳期寺院金堂・中門における２階建構造」の報告をおこなった。

研究会の目的として、第一に既往の古代建築の技術に関する蓄積を整理、体系化することを置くが、第二に古代建築に関する新しい研究視角の提示を積極的に打ち出すことも掲げている。上記二報告はとりわけ後者の一例と位置づけており、今後、研究会の開催を通して、両目的が深まっていくことを期待している。

（清水 重敦）

文部科学省科学研究費

◆カンボディアにおける中世遺跡と日本人町の研究

代表者・杉山 洋　特定領域研究　継続

平成15年度より科学研究費補助金　特定領域研究「中世考古学の総合的研究―学融合を目指した新領域創生―」の一環として「カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究」をおこなっている。

今回の研究においては、カンボジアにおける中世遺跡、わけてもプノンペンとピニャールーの２カ所にあったとされる日本町を対象とし、カンボジアにおける中世遺跡との関連を明らかにするとともに、当該期の日本人町について、日本出土遺物と関連する遺物の出土を元に、その生産流通関係を考察する。一方で、カンボジアにおける中世期の調査研究のために、クメール陶器の窯跡を調査し、クメール陶器の編年研究を推進する。

平成18年度は７月に日本町の第二次発掘調査をおこない、第一地点とした教会跡地にトレンチを設定し、教会の時期特定を目指した。その結果、教会は近代以後と考えられ、日本人町の時期にはさかのぼり得ないことがはっきりした。１月にはソサイ窯跡群の第４時発掘調査をおこなった。今回の調査で窯体のほぼ半分の様子が明らかとなり、窯構造と規模を特定することができた。この調査に合わせて現地でシンポジウムをおこない、近年盛んになっている現地での考古学的調査についての情報交換をおこなうことができた。

◆推論機能を有する木簡など出土文字資料の文字自動認識システムの開発

代表者・渡邉 晃宏　基盤研究（S）継続

５カ年計画の第４年次にあたり、ａ文字画像データベースの開発、ｂ文字画像鮮明化のためのシステムの開発、ｃ木簡解読のための支援データベース群の構築、ｄ文字自動認識システム（ＯＣＲ）の開発の４項目につき、引き続き順調に研究・開発を進めている。

まず、ａについて。一昨年度ＷＥＢ公開した木簡の文字画像データベース「木簡字典」を、４文字までの複数文字列検索が可能なシステムにヴァージョンアップして公開した。また、これに合わせて文字画像を大幅に拡充し、文字種1,049種、文字数約15,000文字となった。これにより約1,500種あるといわれる木簡に使われる文字の主要なものをほぼカヴァーできるようになった。

次にｃ・ｄについて。昨年度開発したオフライン木簡文字認識システム「Mokkan Shop」の試作版が完成し、2006年12月に奈文研で開催した木簡学会第28回研究集会においてデモをおこない、希望者に試作版を頒布した。実際に使用していただき、その結果のアンケートに基づき、2007年度にさらに改良を加える予定である。また、「Mokkan　Shop」試作版には、昨年度に研究分担者の東京農工大学の中川正樹先生の研究室において開発した地名・人名・物品名の文脈処理モジュールを実装し、その釈読の有効性を高めるのに成功した。

これまで独立して進めてきたａからｄまでの研究開発を統合し、一元的な木簡釈読支援システムを構築することについても、一定の見通しを得ることができた。

木簡文字自動認識システム　Mokkan Shop の検索画面

◆東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究－特に豚、馬、牛について

代表者・松井 章　基盤研究（A）継続

平成15年度～18年度までの４年間、基盤研究（A）「東アジアにおける家畜の起源と伝播に関する動物考古学的研究―特に豚・馬・牛について」を実施した。

本研究を通じて韓国、台湾、中国、ロシアの研究者らを訪問して動物考古学研究のネットワークを構築し、各地における家畜の出現期とその伝播の実相の一端を明らかにすることができた。特に韓国の南部、金海会峴里貝塚の紀元前１世紀の層で、すでに牛馬が普及していたことを確かめ、なぜ日本への伝播が数百年、遅れたのかという問題を提起できたことは大きな成果といえる。

◆日中古代墳墓副葬品の比較研究

代表者・金田 明大　基盤研究（A）継続

高句麗王陵に関する報告書が刊行され、その副葬品の内容がある程度明らかになったことにより、５世紀の日本列島に出現する騎兵装備、さらには同じ頃から普及し始める馬具は、高句麗を含む中国東北地方を源流とし、韓半島を経由してもたらされた蓋然性が高くなった。また、文献等からも日中の直接的な交流が伺える６～７世紀について、中原、西方、北方の各地域の要素も混在する遼西地域の隋唐墓副葬品を対象に比較検討をおこなった。

◆古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播に関する研究

代表者・山崎 信二　基盤研究（A）継続

本研究は、日本・韓半島・中国の８世紀初頭頃までの瓦について、国ごとに文様や製作技術の変遷を把握し、国を越えた技術伝播の様相を解明することを目的としている。２年めにあたる本年度は、韓国ソウル地域出土の百済漢城時代の瓦と慶州皇龍寺出土瓦、中国南朝の建康城および南朝・唐代の揚州城出土瓦の調査を実施した。また、中国の研究者を日本に招聘し、意見交換をおこなった。

◆遺跡出土の建築部材に関する総合的研究

代表者・川越 俊一　基盤研究（A）新規

今年度は、４ヶ年計画の初年度で、全国の出土建築部材のデータベースの作成に着手するとともに、出土建築部材に関わる先行研究の整理をおこなった。また、飛鳥・藤原地区出土の出土建築部材および他府県出土の建築部材を調査し遺跡出土の建築部材に関する総合的研究、調査を通して出土建築部材の調査手法の検討もおこなった。

◆古代官衙の造営技術に関する考古学的研究

代表者・山中 敏史　基盤研究（B）継続

今年度は、最終年度にあたるため、官衙建物に伴う諸属性の抽出と分類、各属性の有する意味について再整理をおこなった。そして、これまでに作成してきたデータベースを活用し、柱掘方形状・平面規模・深さ・向き、柱筋の通り具合、建物平面規模・柱間寸法などについて、国衙・郡衙・城柵・国府・官衙関連・居宅・集落の各遺跡種別間で対比させながら統計的分析を進めた。その結果、方形柱掘方掘削技術、掘方規模と深さとの相関関係、柱間寸法の変遷、広廂化などにおいて、官衙造営工法の特質を明らかにした。また、門形式には官衙間における等級格差が反映されていることも判明した。さらに梁行多間型建物、Ｌ字形隅柱掘方、変則的廂建物と在来工法との関係についても追究した。こうした研究成果は『古代官衙の造営技術に関する考古学的研究』のまとめて2007年３月に刊行し

た。また、収集整理した官衙関係遺跡の資料のうち、中国地方以東の官衙遺跡のデータは、地方官衙関係遺跡データベースとして奈良文化財研究所ホームページ上で公開している。

◆富本銭と和同開珎の系譜をめぐる比較研究

代表者・松村 恵司　基盤研究（B）継続

本年度は、富本銭と和同開珎をつなぐ古和同銭の製作技術の研究をおこない、明日香村西橘遺跡出土品の分析を通して、銭文側だけを鋳型に連続して押印し、鋳造後に背面をロクロで仕上げる特異な種銭の製作技法の存在を明らかにした。復原された造型方法で鋳造実験を実施したところ、きわめて合理的で効率的な種銭の製作方法であることを確認でき、全国流通を目指した和同開珎の大量発行に向けた技術革新の実態を明らかにすることができた。また全国出土和同開珎の集成作業に向けて、西日本の出土事例の悉皆調査を実施するとともに、昨年度開催した研究集会の研究発表記録集「和同開珎をめぐる諸問題Ⅰ」を刊行した。

◆霊廟建築における荘厳手法の総合的比較研究

代表者・窪寺 茂　基盤研究（B）継続

本研究は、全国各地の霊廟建築を対象とした構造・意匠・装飾技法面の調査研究から霊廟建築の荘厳に関わる設計理論・手法を明らかにし、当時の建築文化の実像を究明することを目的とする。2年目にあたる本年度は、宮城・愛知・鳥取県所在の霊廟建築4件計12棟のほか、塗装技法究明のための日光・長野・埼玉県所在建築計7棟の現地調査、さらに名古屋市及び前田育徳会所蔵金具の調査を実施した。また、日光建築造営関係文書の一部をデータ化した。

その結果、同一社殿形式における荘厳手法の類似・相違点の把握、技法の伝承が途絶えている塗装技法（土朱塗・チャン塗）の確認などの成果を得た。

◆「灰吹法」の実証的検証に基づくわが国における金・銀の製錬技術の技術史的研究

代表者・村上 隆　基盤研究（B）新規

本研究は、従来からの文献史料の調査を踏まえつつ、最近の考古学的発掘によって新たに出土した実資料に対する科学的調査の成果に基づき、特に金・銀の純度を高める精錬技術の技術移転と定着、さらには技術発展に関して実証的な検証をおこなうことを目的とする。本年の研究成果として、8世紀後半に、金・銀の純度を上げる灰吹法の原型とも呼べる方法が、実際におこなわれていたことを具体的に奈良県飛鳥池遺跡から発掘された資料の分析に基づいて検証したことが挙げられる。これにより、これまで16世紀まで下がるといわれていた日本での起源を850年程度も遡ることになった。この発見は、日本の科学技術史において大きく位置づけられよう。また、島根県大田市に位置する石見銀山遺跡において、実際に灰吹法に用いた鉄鍋を新たに発見した。灰吹用の鉄鍋の確認自体は2例目であるが、従来1533（天文2）年において導入されたとする灰吹法に鉄鍋を用いた物証として注目される。

◆打音試験法及びアコースティックエミッション法による石造文化財の劣化診断技術の開発

代表者・高妻 洋成　基盤研究（B）新規

平成18年度の研究成果の概要は以下の通りである。1）石造文化財を損傷することのない程度までの打撃エネルギーの低減、マイクロフォンと打撃ポイントの距離の一定化、打撃音の空気伝播音と石材伝播音の同時計測を可能とする装置を開発・試作した。2）AE波形の記録と周波数解析、可聴域のAE計測、石造文化財表面へのセンサーの設置法などに改良を加えた石造文化財用AE測定装置を開発した。3）岩石種による固有周波数の違い、石材の密度と周波数成分の解析、浮き・空洞などの内部欠陥を持つ石材から発生した打撃音の特性について、石造文化財に適した打音試験法を開発するための基礎的なデータを収集した。4）クラック進展位置の特定、破壊モード（曲げ・せん断）の推定について石造文化財に適したAE法を開発するための基礎的なデータを収集した。5）フィールド調査における石造文化財の劣化状態調査では、平城宮跡より出土した礎石に対して打音試験をおこなったところ、肉眼では表面的に確認することのできない表層剥離による浮きの存在とその広がりを検出することができた。本年度は初年度にあたり、装置の試作に重点をおき、研究を進めてきた。既存の装置とあわせて試作装置を用いて得た基礎データについては、現在、解析を進めているところである。

◆南都における廃仏毀釈後の資料動態に関する調査研究

代表者・吉川 聡　基盤研究（B）新規

本研究は、南都の古寺社が所蔵してきた歴史資料について、本来伝来した場所から流出した状態で現在保管されている資料群の性格を明らかにする。

そこで、東大寺図書館所蔵の中村準一寄贈文書について、今年度は新修東大寺文書聖教第15函を調査した。その内容は、近世に興福寺の唐院・新坊に仕えていた中村家の、江戸後期から明治初年までの古文書類だった。近世奈良町の号所に関する史料など、興福寺・奈良研究の上で注目されるものも含まれていた。

◆大極殿院の思想と文化に関する研究

代表者・内田 和伸　基盤研究（B）新規

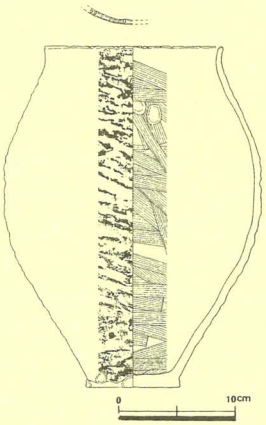
5月5日の節会の復興に関する研究をおこない、奈良時代におこなっていた騎射を復興し、遺跡の活用に役立てるプログラムの提案を『遺跡学研究』にて公表した。場所は朱雀門前か、朝堂院南門前の利用が可能と分かった。

また、平城宮第一次大極殿院には「宮殿は宇宙を象る」という設計思想があることを明らかにし、その延長上で高御座の復元イメージを『日本史の方法』にて公表した。

◆東アジアにおける弥生時代タタキ技法波及経路の研究

代表者・深澤 芳樹　基盤研究（C）継続

本研究は、アジア地域のタタキ技法の検討をとおして、日本列島における弥生土器タタキ技法の波及経路を特定しようとする試みである。本年度は、最終年にあたるので、特に海外研究者との意見交換に重点をおいた。大韓民国の研究者と北部九州地域の土器を共同で観察したり、また大韓民国高麗大学でその成果と共同研究のあり方について発表する機会を得た。



タタキメのある松菊里式土器
（大韓民国忠清南道寛倉里遺跡）

◆古代の宮殿および官衙の占地に関する復元的研究

代表者・小澤 毅　基盤研究（C）継続

本研究は、近年の考古学的調査の進展を承けて、7世紀以前の宮殿の所在を具体的に推定し、占地上の通有の特徴ならびに時代や地域による変化を把握することを目的としている。本年度は、所在がいまだ判明

していない6世紀以前の諸宮をおもな対象として、文献史料との整合性や占地の面から具体的な候補地を選定し、それぞれの妥当性を検証する作業をおこなった。

◆古代冶金工房の基礎的構造に関する考古学的研究

代表者・小池 伸彦　基盤研究（C）継続

本年度は、古墳時代の畿内とその縁辺部の工房ならびに地方の工房について検討を進めた。その結果、鍛冶を伴う工房について、炉跡・土坑・建物・冶金関連遺物という4つの構成要素の態様から、大きく4つの類型を抽出することができた。この4類型は①南郷遺跡、②脇田遺跡、③窪木薬師遺跡、④則清1号遺跡で代表される。これをもとに律令期の工房との差異などを明らかにした。

◆東アジアにおける武器・武具の比較研究

代表者・小林 謙一　基盤研究（C）継続

古墳時代の武器・武具の変遷において、5世紀第2四半世紀の画期は、騎兵装備が在来の武装に代わる新式の武器・武具として導入されたことによるものであった。なお、初期馬具の年代観に基づくと、日本列島における乗馬の開始は、武器・武具の画期より早く、両者の間に時期差が認められる。また、日本の場合、「騎兵装備の導入」が、必ずしも「騎兵の普及」につながるものではなかった。

◆金工技術から見た古代倭王権と東アジア

代表者・高橋 克壽　基盤研究（C）継続

本研究の最終年度にあたる今年度は、研究成果を報告書にまとめる作業をおこなった。5世紀にあった金工品をめぐる二つの態様は当時まだ対外交渉が一本化されていなかったことを示すものであったが、倭王武の時代に変革が生じ、百済の技術や制度を取り入れることに大きく方針がシフトした。これは渡来系集団を倭王権内部に取り込んだ新たな政治体制の出現を意味すると読み取れるとの報告をした。

◆住宅系伝統的建造物の保存修復と居住環境整備手法の研究

代表者・島田 敏男　基盤研究（C）継続

本研究は、伝統的な建造物を保存し、かつ普通に居住するための方策を研究したものである。ヒアリング調査によって伝統的建造物での居住実態および居住者の意向を明確にし、また民家再生事例等についての事例集を収集し、保存の目的や制度に則した修理・改造のガイドラインを検討した。

◆日韓出土土器による3・4世紀国際交流の研究

代表者・次山 淳　基盤研究（C）新規

本研究は、考古資料なかでも土器を主たる材料として、日本列島の弥生時代終末から古墳時代前期にあたる3・4世紀における日本列島と朝鮮半島との交流のありかたを検討しようとするものである。この交流の主要な場を畿内、大阪湾、瀬戸内海、北部九州、壱岐、対馬、朝鮮半島にそれぞれもとめ、初年度である本年度は、基礎文献資料収集、土器資料の実態把握、実地調査等を実施した。

◆出土陶磁器の保存科学的研究－表面の光学的物性変化と保存処理－

代表者・降幡 順子　若手研究（B）継続

本研究は、出土陶磁器の外観に係る、釉薬の風化状態、光学的物性、保存修復処理材料の関連性に関する基礎的研究をおこなうことを目的とした。本年度は、簡便に処置が可能な樹脂を選定し、それらの光学的物性に関するデータの収集を主におこなった。処置後の光学的物性変化についても測定をおこなっているが、さらに釉薬表面の状態に関する継続的な調査をおこなっていく予定である。

◆5，6世紀日朝交渉の考古学的研究

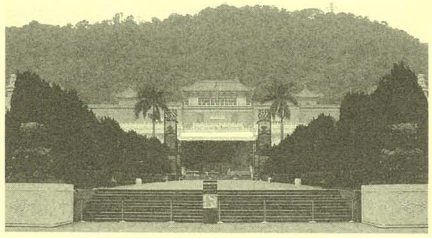
代表者・高田 貫太　若手研究（B）継続

本年度は、1945年度以降、現在までに報告されている5，6世紀朝鮮半島洛東江以東地域で確認された日本列島系資料を抽出し、データベースの作成をおこなった。古墳時代の渡来文化や地域間交流に関するシンポジウム（考古学研究会総会、国立歴史博物館国際シンポジウムなど）に参加し、古墳時代の渡来文化の受容様相について発表をおこなった。その際、洛東江以東地域（いわゆる新羅地域）と日本列島の交渉の具体化に重点を置いた

◆東アジアの鉛釉陶器－考古資料にみる鉛釉陶器生産と唐三彩の影響

代表者・神野 恵　若手研究（B）継続

本年度も引き続き河南省鞏義市黄冶窯や唐大明宮太液池などから出土した唐三彩の資料整理を進めるとともに、今年度は台湾歴史博物館と故宮博物院を訪れ、各博物館が所蔵する唐三彩資料を実見した。また、今年度は西大寺食堂院や平城宮東院地区などの発掘調査で奈良三彩、緑釉などの鉛釉陶器が多量に出土したため、その整理作業と平行して、これまでの調査で出土した鉛釉陶器の調査研究を進めた。



2006年度の2月にリニューアルした台湾國立故宮博物院

◆弥生・古墳時代における日韓墳墓出土鉄製武器の比較研究

代表者・豊島 直博　若手研究（B）継続

研究2年目の今年度は、日本の古墳時代前期の刀装具について論文をまとめ、ヤリの編年について学会で発表した。また、釜山周辺の鉄製刀剣について広く資料調査をおこない、2～4世紀の韓国における刀剣装具の変遷をほぼ把握できた。近年提唱されている初期国家論では、鉄の流通の掌握が国家形成に大きな役割を果たしたとされている。その掌握は、鉄素材ではなく舶載鉄製品からはじまったという展望をもつに至った。

◆古代東アジアにおける木造塔の構造と意匠に関する研究

代表者・箱崎 和久　若手研究（B）継続

中国江蘇省蘇州に残る、塔身を磚造とし、軒を木造とする磚身木檐塔を4塔実見した。いずれも八角塔で、組物や内部架構を木造とする塔もある。しかし、内部と外部の構造的な連結はないようで、言わば塔身と軒の構造が分離している。組物や架構のうち、どこまでが構造的な面で木造塔を模しているのか、塔身を磚造とする構造的な自由度はどのあたりにあるのか、さらなる検討が必要である。

◆古代中世の建築用語とその規格－造営史料と建築部材の検討を通して－

代表者・西田 紀子　若手研究（B）継続

古代中世の建築関連用語について、東寺百合文書を中心に研究を進めている。昨年度から継続して東寺百合文書所収の造営関係史料から建築関連用語を収集し、データベースに入力した。また、鳥取県三仏寺投入堂、岡山県吉備津神社本殿など、古代中世の寺院建築についても検討した。

◆飛鳥藤原出土木簡の資料的検討と官司運営の復元

代表者・市 大樹　若手研究（B）新規

本研究は、飛鳥・藤原地域から近年出土した木簡の資料的検討を進め、最終的には

7世紀後半から8世紀初頭、すなわち律令国家が形成される時期の官司運営の具体的様相を探ることを目的とする。本年度は飛鳥池・山田寺出土木簡の整理をおこない、『飛鳥藤原京木簡一』をまとめた。また藤原京跡出土木簡の検討を進め、木簡学会で「大宝令施行直後の衛門府木簡群」と題する口頭発表をおこなった。

◆古代東アジアにおける火葬習俗の伝播に関する基礎的研究

代表者・小田 裕樹　若手研究（B）新規

本研究は、日本古代の「火葬」の歴史的意義を明らかにするため、東アジアにおける火葬の位置づけとその伝播過程を明らかにすることを目的とする。

研究初年度の今年度は、報告書の検索によるデータ集成に努めた。特に韓半島における火葬墓資料の集成を重点的に行った結果、韓国においても近年の発掘調査による火葬墓の調査事例が増加し、墳墓研究の蓄積も始まりつつあることが分かった。

また、従来の研究成果および本研究の今後の見通しについて、大韓民国国立慶州文化財研究所において口頭発表をおこなった。

◆日本中世の国際都市における都市空間の展開過程に関する復元的研究

代表者・清永 洋平　若手研究（B）新規

本研究は、日本の中世において国際交易を担った都市の空間を復原的に探り、その都市空間の形態と意味を考察するものである。初年度にあたる本年度では、堺、博多、長崎の資料収集を進めると同時に、福江、平戸、伊倉における唐人町の現地調査を実施した。また、上記唐人町では近世期の都市復原図の作成を通して、国内交易港と国外交易港の形態と立地についての検討をおこなった。

◆東アジアにおける文化遺産のオーセンティシティに関する比較研究

代表者・清水 重敬　若手研究（B）新規

本研究は、東アジアにおける不動産文化遺産のオーセンティシティ（真実性）概念を抽出し、比較して論ずるものである。本年度は、韓国について、文化財保護黎明期の様相を日本と比較分析し、中国に関して、「原状（(Historic Condition)」という概念が文化遺産保護の根本概念となることを抽出し、その歴史と現在について考察を加えた。

◆倉の立地から見た集落構造とその景観文化：群倉型集落を事例として

代表者・黒坂 貴裕　若手研究（B）新規

本研究は、倉を集落から離して集めて建てる集落構造を持つ地域（群倉型集落）を調査することで、その構造および景観の成立要因について考察する。このような集落は山村・離島・半島に散見できることがあり、本年度は下北半島を中心に調査をおこなった。多くは特徴的な集落構造を観察でき、今回は耕作地及び耕作形態との関わりに注目した。

◆石造文化財と水に関する研究－溶出実験から捉えた化学的風化－

代表者・脇谷 草一郎　若手研究（スタートアップ）新規

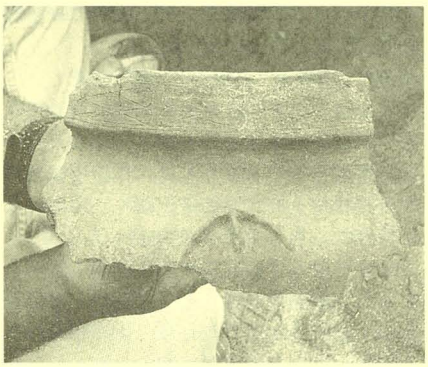
本研究は、屋外に露出展示される石造文化財の劣化要因として化学的風化に着目し、石造文化財の劣化において水がおよぼす影響、および化学的風化に対する保存処理法の有効性を検討するものである。

今年度はチリ国イースター島のモアイ石像に用いられた石材を中心に、石材の溶脱試験および強度試験を実施した。その結果、保存処理法の有効性は水のpHや温度によって左右されることが示唆された。

◆島嶼環境におけるラピタ人の拡散・適応戦略を探る考古学的研究

代表者・石村 智　若手研究（スタートアップ）新規

本研究は、約3000年前の南太平洋一帯に存在した謎の海洋民族、ラピタ人の実体を考古学的に解明し、さらにはヒトの島嶼環境への拡散・適応過程を探ることで人類史の一端を明らかにすることを目的とする。平成18年度は、フィジー諸島共和国のボウレワ遺跡の出土資料の分析を進め、多くの知見をえた。その成果の一部については、米領サモアで開催された国際学会や、いくつかの国際英文誌上で公表した。



フィジー・ボウレワ遺跡出土のラピタ土器

◆中世寺院建築における意匠表現の日韓比較研究－斗拱の表現方法を中心に－

代表者・崔 ゴウン　特別研究員奨励費　継続

今年度は、昨年度におこなった中国・韓国・日本寺院建築のうち詰組を有する建物のリストアップ・図面整理作業から、特に重層寺院建築に対象を絞り、その木構造と斗拱の表現比較を行った。その結果、韓国寺院建築の重層木構造は繋梁の上に上層の外側柱を立てる独特な手法を用いており、四隅に‘耳高柱’という中国や日本では見られないユニークな通柱を用いていることが明確になった。斗拱は日本禅宗様建築の場合、中央間に2具、脇間に1具と定型化している反面、韓国の場合、不規則的でそこから生じる寸法の差は一般的に隅斗拱の肘木寸法で調整している。その意匠表現においては日本の場合、非常に企画的なものであるのに対し韓国の場合、彩色を施し彫刻を加えるなど、日本に比べ意匠面で斗拱自体の占める割合が高いことが再確認できた。今後は今年度の研究対象以外の遺構を中心に、引き続き比較をおこなう予定である。

◆平城京跡出土こけら経の整理と保存にかんする研究

代表者・山本 崇　㈶福武学術文化振興財団歴史学・地理学助成　新規

本申請研究は、奈文研が保管する約9,500点のこけら経など中世木簡について、報告書刊行にむけた整理を本格化し保存方法の検討を進めるとともに、仏教考古資料からみた中世社会を考察せんとするものである。今年度は、遺物全点の現状確認、モノクロ写真のデジタル化、遺物整理の基礎台帳の作成を完了し、整理の済んだ地区の木簡から釈読を開始した。また、今後の保管方法を検討するために一部のこけら経の保存処理を先行しておこなうとともに、全国出土こけら経の情報蒐集、それとの比較検討、伝統技術を用いた製作実験によるこけら経の形態的特徴の検討などをおこなった。

学会・研究会等の活動

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2006年７月14～15日に第18回総会および研究会をおこなった。

７月14日：総会　参加者112名（含委任状）・講演　参加者91名「古墳内部遠隔撮影の実際」（井上直夫氏；研究会副会長）

７月15日：報告　参加者108名「白黒写真処理の実態」（研究会白黒写真部会）

報告　参加者108名「業務に使用するデータ作成の実際」（玉内公一；ティー・コア）公開講座　参加者101名「展覧品撮影・私の場合」　一日目は2006年３月に奈良文化財研究所写真室が高槻市教育委員会からの依頼を受けておこなった闘鶏山古墳の内部遠隔撮影の報告を中心に高槻市教育委員会高橋公一氏にも高槻市の古墳調査について講演をいただいた。２日目は研究会に於いて白黒写真処理について実態調査をおこなっている「白黒写真部会」から現状の報告をおこなった。４回目となった「私の場合」は埋蔵文化財からは少し離れた「展覧品撮影」について名古屋市博物館の杉浦秀昭氏を司会者に宮内庁正倉院事務所の北田仁司氏に宝物撮影の実際を報告いただいた。

（中村一郎）

◆日本遺跡学会

2006年度の日本遺跡学会大会を2006年11月25・26日に平城宮跡資料館講堂で開催した。両日の参加者は会員・一般合わせて120人余りであった。一日目は総会の後、西和彦氏（文化庁）に「文化遺産の保護に関する国際協力の現状と課題」、森本晋氏（奈文研）に「バーミヤーン遺跡保護に対する日本の取り組み」と題してそれぞれ特別講演をしていただいた。大会テーマを「遺跡整備における植生環境の復元」としており、二日目は金原正明氏（奈良教育大学）の基調講演「遺跡整備における植生環境の復元」と次の５本の事例報告があり、討論を行った。平塚幸人（仙台市富沢遺跡保存館）「富沢遺跡の事例」、青野友哉（伊達市噴火湾文化研究所）「北黄金貝塚における植生復元と活用」、岡田康博（青森県教育庁）「特別史跡三内丸山遺跡における植生環境の復元整備」、新東晃一（鹿児島県埋蔵文化財センター）「上野原遺跡の植生環境の復元」、高瀬要一（奈文研）「平城宮跡東院庭園の植栽復原」。

（内田和伸）

◆木簡学会研究集会

2006年12月２・３日、第28回木簡学会総会・研究集会を平城宮跡資料館講堂において開催した（参加者166名）。２日は総会のあと、市大樹氏（奈良文化財研究所）の研究報告「大宝令施行直後の衛門府木簡群」があり、中務省との関わりが指摘されている藤原京跡左京七条一坊西南坪出土の木簡群について、衛門府の木簡群であるとする新知見が、初めてまとまった形で報告された。引き続き浅野啓介氏（奈良文化財研究所）「2006年全国出土の木簡」により全国の木簡出土状況を概観した。３日は徳島県観音寺遺跡出土木簡について大橋育順（㈶徳島県埋蔵文化財センター）・和田萃（京都教育大学）両氏、滋賀県西河原宮ノ内遺跡出土木簡について畑中英二（滋賀県教育委員会）・大橋信弥（安土城考古博物館）両氏、難波宮跡出土万葉仮名木簡について藤田幸夫氏（㈶大阪市文化財協会）の報告があった。また、西大寺食堂院跡の井戸から出土した木簡群について、渡辺が報告した。なお、『木簡研究』第28号を刊行した（編集担当：渡辺）。

（渡邉晃宏）

◆条里制・古代都市研究会

2007年３月３日・４日の両日、第23回条里制・古代都市研究会大会が、奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。「地方官衙研究の現状と展望」をテーマに、坂井秀弥氏「地方官衙遺跡の調査とその保護―現状と課題―」、森公章氏「文献史料から見た郡家の構造と機能」の２本の基調となる報告がおこなわれた後、福岡県小郡市・小郡官衙遺跡、福島県・白河郡の郡家遺跡、佐賀県・肥前国松浦郡の官衙と主要交通路、愛媛県松山市・久米官衙遺跡、静岡県藤枝市・御子ヶ谷遺跡、京都府城陽市・正道官衙遺跡に関する最新の調査研究成果が報告された。

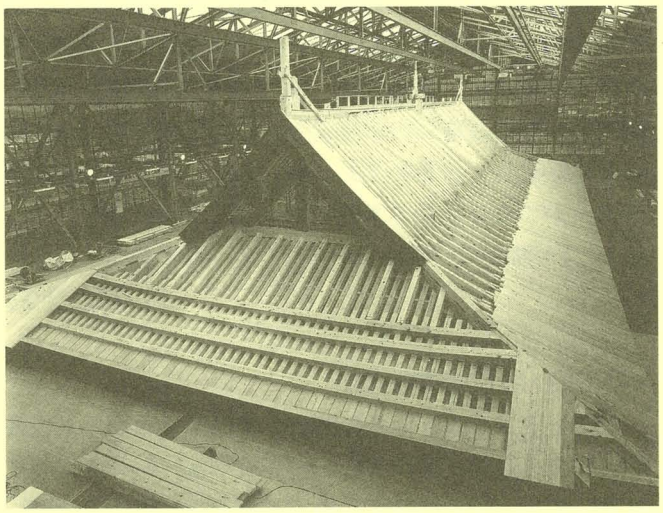
（山本崇）

文化庁が実施する宮跡復原整備事業等への指導・助言・協力等

●平城宮跡の整備

特別史跡平城宮跡第一次大極殿復原事業

第一次大極殿復原事業について、文化庁および文部科学省大臣官房文教施設企画部参事官付平城宮跡整備事務所に対し、施行・監理業務に関する指導・助言をおこなった。なお、大極殿は2007年３月現在、上層屋根下地の工事中である。平成19年度からは、いよいよ瓦を葺き始める予定である。



第一次大極殿正殿（2007年2月撮影）南西から

特別史跡平城宮跡第一次大極殿地区復原整備に関する調査検討業務

文化庁からの委託を受け、第一次大極殿が完成する2010年時における、大極殿院の暫定的な整備計画案の作成をおこなった。計画策定にあたっては、平城宮跡の将来計画を見据えて整備をおこなう部分と暫的的な措置とする部分の検討をおこないつつ、里道・水路の取り扱い、遺構保存、復原的地盤と整備地盤の調整、大極殿院活用上の導線計画、回廊の遺構表示方法および囲障施設、大極殿院内の舗装手法、舗装にともなう排水量計算および排水計画、防災施設計画、便益施設計画等の検討をおこない、上記検討結果にもとづいて、整備計画案を作成した。

●高松塚古墳の発掘調査

文化庁から委託された国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に伴う発掘調査。壁画が描かれた石室を解体可能な状態に露出することを目的に、2006年10月２日から墳丘の築成状況や壁画の劣化原因の調査に着手した。古墳は特別史跡であるため、発掘範囲を極力小面積におさえる必要があり、作業者の安全と解体作業に最低限必要なスペースを考慮した上で、上下２段掘りの調査区を設定した。上段調査区は南北7.2m、東西６mの規模で、墳頂下2.8mまで掘り下げ、そこに１m幅のテラスを設け、石材を吊り上げるためのレールクレーンを設置した。また上段調査区の周囲に室温10°湿度90%に環境制御可能な断熱覆屋を建設し、その内部で下段調査区の調査をおこなった。年度末までに下段調査区を2,1m掘り下げて石室を露出させ、石室の規模や構造、損傷状況などを明らかにした。墳丘は３～５㎝の厚さの版築を積み重ねて築かれているが、その層理面でムシロ目状の痕跡や搗き棒痕跡を多数検出し、斜面に版築を施す際の古代の土木工法を明らかにすることができた。また版築層をつき破る多数の地割れや亀裂を検出し、大規模地震による墳丘や石室の損傷が、壁画の保存環境に影響を及ぼしている事実を明らかにした。12月１・２日に開催した現地見学会には、地元住民や研究者など1,950名の見学者が訪れた。発掘調査は４月から始まる石室の解体作業と並行して、次年度も継続予定。

姿を現わした石室

版築層に残るムシロ目と搗き棒の痕跡

●キトラ古墳の調査

キトラ古墳出土遺物の調査

発掘調査によって石室内外から出土した各種遺物に対して分析を進めた。

石室内壁面から剥落した漆喰片は、成分分析及びプレパラートによる断層観察をおこなった。また、盗掘によって破壊された石室南壁の凝灰岩片についても、プレパラートの作成により産地推定の根拠を求めた。これらの脆弱化した凝灰岩片については、保存処理をおこなって接合・検討を加えたところ、石室南壁の盗掘穴内で位置が特定できる数点の接合資料が得られた。

石室内より出土した大量の漆膜片は、実測図を作製しながら観察したところ、棺の特徴をある程度推測できる情報が得られた。また、石室内には漆塗木棺のほかに、木に直接黒漆を塗った別の製品があったことも判明した。他には土ごと切って取り上げた石室床面資料の分析もおこない、石室内での微細遺物の分布が判明した。これら一連の調査成果については、本年度から発掘調査報告書の作製作業を開始し、来年度刊行して公開する予定である。

なお、今後の保存対策のため石室の形状を正確におさえる必要があることから、石室内の３Ｄ測量を実施した。

発掘調査現地説明会

◆2006年6月30日（金）

平城第404次発掘調査（西大寺旧境内）現場一般公開

都城発掘調査部史料研究室　馬場　基

参加者人数：600名　調査面積：1,762㎡

◆2006年9月30日（土）

飛鳥藤原第142・144次（藤原宮朝堂院第四堂）発掘調査

都城発掘調査部考古第三研究室　中川　あや

参加者人数：515名　調査面積：2,024㎡

◆2006年10月7日（土）

平城第404・410次発掘調査（西大寺旧境内）

都城発掘調査部史料研究室　馬場　基

参加者人数：900名　調査面積：1,775㎡

◆2006年11月14日（火）～16日（木）

飛鳥寺講堂跡現場公開

都城発掘調査部　玉田　芳英

参加者人数：2,077名　調査面積：約55㎡

◆2006年12月9日（土）

平城第401次発掘調査（東院地区）

都城発掘調査部考古第一研究室　和田　一之輔

参加者人数：445名　調査面積：1,771㎡

◆2007年2月11日（日）

飛鳥藤原第146次発掘調査（甘樫丘東麓遺跡）現地見学会

都城発掘調査部遺構研究室　西田　紀子

参加者人数：5,015名　調査面積：916㎡

◆2007年3月24日（土）

平城第406次発掘調査（第二次大極殿院東方官衙地区）

都城発掘調査部遺構研究室　粟野　隆

参加者人数：450名　調査面積：1,296㎡

◆2007年3月31日（土）

飛鳥藤原第145次（石神遺跡第19次）発掘調査

都城発掘調査部考古第二研究室　小田　裕樹

参加者人数：1,153名　調査面積：870㎡

2 研修・指導と教育

埋蔵文化財担当者研修と指導

文化財の保存・活用を推進し、国民に対するサービスの向上を図るため、地方公共団体等の埋蔵文化財担当職員の資質向上を目的とする研修を実施している。今年度は、一般研修１課程、専門研修12課程の合計13課程の研修を開催した。研修総日数129日、研修生総数182名であった。

また、埋蔵文化財センター及び各研究部では、要請にしたがって地方公共団体や関係機関が実施する発掘調査・遺物の保存・遺跡の保存・遺跡整備等に対しての指導・助言等の協力をおこなっている。2006年度の主なものの一覧を別表に掲げた。

このほか、文化庁、各公共団体、関係機関からの依頼を受けて、発掘調査、動物遺存体の同定、年輪年代測定、遺物の保存処理・分析等の受託研究もおこなった。

京都大学（大学院）との連携教育

京都大学との連携教育では、客員として６名が京都大学大学院人間・環境学研究科共生文明学専攻－文化・地域環境論講座の文化遺産学分野において、文化財調査法論２（山中敏史・窪寺茂）、環境考古学論２（光谷拓実・肥塚隆保・松井章）、文化遺産学演習１（山中・窪寺）、文化遺産学演習２（光谷・肥塚・松井）、講座リレー講義の文化・地域環境基礎論の分担（松村恵司）を担当した。

都城・寺院・地方官衙・集落遺跡論、年輪年代学、保存科学、環境考古学などの講義・演習・実習などをおこない、この客員分野に所属する院生（博士後期課程10名、修士課程５名）を指導した。

奈良女子大学（大学院）との連携教育

奈良女子大学大学院との連携教育では、大学院人間文化研究科比較文化学専攻文化史論講座の客員教員として３つの科目を担当し、博士後期課程の大学院生の指導をおこなっている。すなわち、小林謙一（客員教授）「日本考古学の諸問題」、次山淳（客員助教授）「歴史考古学特論」、渡辺晃宏（客員教授）「歴史資料論」である。

いずれも、飛鳥地域、藤原宮・京跡、平城宮・京跡など実地の遺跡とその発掘調査、及び瓦や土器、木製品、木簡をはじめとする出土文字資料などの遺物の調査研究に密着した授業であり、大学における通常の授業では経験できない、奈文研ならではの特色ある教育を実践する場となっている。

2006年度　日本各地の遺跡・建造物等に関する指導・協力一覧　（委員の委嘱を受けているもの）

（青森）	三内丸山遺跡
（岩手）	志波城跡　平泉遺跡群
（秋田）	森吉山ダム地内遺跡群
（宮城）	多賀城跡　亘理町三十三間堂官衙遺跡
（福島）	宮畑遺跡　根岸官衙遺跡群
（栃木）	馬屋久保遺跡　上神主・茂原官衙遺跡
（茨城）	常陸国衙跡　水戸市史跡等
（新潟）	佐渡金銀山遺跡
（福井）	史跡王山古墳群・兜山古墳　福井県朝倉氏遺跡　国吉城址史跡公園等
（富山）	王塚・千坊山遺跡群
（岐阜）	長塚古墳　弥勒寺遺跡群　美濃国分寺跡
（静岡）	新居関跡　興国寺城跡　長浜城跡　横須賀城跡・高天神城跡　遠江国分寺跡
（愛知）	名古屋城跡　正法寺古墳
（三重）	上野城跡　天白遺跡　久留倍遺跡　伊勢国府跡・伊勢国分寺跡
（滋賀）	近江国庁跡　安土城跡　彦根城跡　大津市伝統的建造物群　下之郷遺跡
（京都）	恭仁宮跡　井手町内遺跡　恵解山古墳　京都府近代和風建築　高麗寺跡　大覚寺
（大阪）	堺市史跡土塔　新堂廃寺等　百済寺跡　闘鶏山古墳
（兵庫）	赤穂城跡　篠山城跡　法隆寺領播磨国鵤荘史跡　新宮宮内遺跡　茶すり山古墳　姫路城石垣整備　但馬国分寺跡・山名氏城跡　田淵氏庭園
（奈良）	旧大乗院庭園　藤ノ木古墳　平城京左京三条二坊宮跡庭園　中宮寺跡　橿原市今井町伝統的建造物群保存地区　尼寺廃寺跡　大安寺旧境内　大宇陀町伝統的建造物保存地区　市尾墓山古墳　宇陀市松山地区伝統的建造物群
（鳥取）	妻木晩田遺跡　伯耆古代の丘　栃本廃寺跡　青谷上寺地遺跡
（島根）	石見銀山遺跡　松江城　山城郷北新造院跡　出雲国府跡
（広島）	府中市備後国府跡
（岡山）	鬼城山　第二次山陽遺跡　備中松山城跡　美作国分寺跡
（山口）	下関市史跡
（徳島）	脇町市街地景観整備　阿波国分寺庭園　阿波国分尼寺跡
（香川）	宗吉瓦窯跡　丸亀城跡　快天山古墳　屋嶋城跡
（愛媛）	宇和島城跡　久米官衙遺跡群
（福岡）	大宰府史跡　下高橋官衙遺跡　鴻臚館跡　三雲遺跡等
（佐賀）	名護屋城跡並びに陣跡　天狗谷窯跡　大川内鍋島窯跡　東名遺跡群
（長崎）	原の辻遺跡　鷹島海底遺跡　旧円融寺庭園
（大分）	横尾遺跡
（宮崎）	日向国分寺跡　本野原遺跡

2006年度 埋蔵文化財担当者研修課程一覧

区分	課　程	実施期日	定員	対　象	内　容	担当室	研修日数	申込者数	受講者数
一般研修	遺物観察調査課程	9月4日～9月29日	16名	地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者で、発掘調査の経験が十分でない者	各種の遺物調査に必要な基礎的知識と技術の研修	遺跡調査技術研究室	26日	14名	14名
専門研修	掘立柱建物・礎石建物遺構調査課程	5月15日～5月19日	12名	各地域の中核となる地方公共団体の埋蔵文化財担当職員若しくはこれに準ずる者	古代を中心とした掘立柱建物・礎石建物の調査研究に必要な専門的知識と技術の研修	遺跡整備研究室	5日	20名	20名
	保存科学I（無機質遺物）課程	5月30日～6月7日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	13名	13名
	保存科学II（有機質遺物）課程	6月7日～6月15日	10名	〃	遺物・遺構の保存科学的な調査法および保存修復修理に関する基礎知識と技術の習得を目指す研修	保存修復科学研究室	9日	11名	11名
	文化財写真I（基礎）課程	7月10日～7月26日	10名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な基礎的知識と技術の研修	写真室	17日	12名	11名
	文化財写真II（応用）課程	7月26日～8月9日	10名	〃	埋蔵文化財の写真撮影等に関して必要な専門的知識と技術の研修	写真室	15日	6名	6名
	遺跡地図情報課程	10月24日～10月27日	16名	〃	埋蔵文化財の調査研究へのGISの応用に関する基礎的知識の研修	文化財情報研究室	4日	16名	16名
	自然科学的年代決定法課程	11月14日～11月17日	10名	〃	自然科学的手法による年代測定に関する基礎的知識の研修	年代学研究室	4日	10名	10名
	古代集落遺跡調査課程	11月27日～12月1日	12名	〃	古代集落遺跡の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	遺跡整備研究室	5日	12名	12名
	中近世城郭調査課程	12月12日～12月19日	16名	〃	中近世城郭遺跡の調査・修復に必要な専門的知識と技術の研修	景観研究室	8日	22名	22名
	報告書作成課程	1月10日～1月19日	20名	〃	見やすく読みやすい報告書の作り方と、図録・学術誌編集の基礎に関する研修	企画調整室	10日	21名	20名
	古代陶磁器調査課程	2月1日～2月9日	16名	〃	古代遺跡出土中国・日本陶磁器の調査研究に関して必要な専門的知識と技術の研修	都城発掘調査部	9日	12名	12名
	環境考古学（生物編）課程	2月21日～2月28日	12名	〃	遺跡の発掘において、第四紀学の成果を用いて過去の自然環境を推定復原する方法を学ぶ研修	環境考古学研究室	8日	16名	15名

3 展示と公開

飛鳥資料館の展示

◆春期特別展示「キトラ古墳と発掘された壁画たち」

平成18年 4月14日～6月25日

キトラ古墳では保存状態が危惧される壁画を取り外して保存修復する試みが続けられている。今回はそのうち、保存修復が一段落した「白虎」を、5月12日から28日までの17日間、飛鳥資料館で特別公開することが決定された。これに合わせて春期特別展示として、キトラ古墳の壁画についての特別展示を企画した。

◆秋期特別展示「飛鳥の金工　－海獣葡萄鏡の諸相－」

平成18年10月14日～11月26日

高松塚古墳の解体に向けての調査がおこなわれている本年度、当館では東アジア金工の調査の一環として、高松塚古墳出土海獣葡萄鏡の類例調査をおこなってきた。本年度秋期特別展示ではその調査の成果と合わせて、海獣葡萄鏡の同型鏡を展示し、壁画古墳の出土品のあり方についての展示をおこなった。

◆夏期企画展示「東アジアの十二支像」

平成18年8月1日～9月3日

当館では近年話題となっている壁画古墳の研究を行い展示に反映している。今回はキトラ古墳の壁画に描かれて話題となった獣頭人身像の十二支にちなんで、中国・朝鮮半島を中心とする十二支像の変遷を取り上げた展示をおこなった。

◆冬期企画展示「発掘調査速報展」

平成19年1月16日～2月25日

飛鳥地方では毎年多くの発掘調査がおこなわれ、多大な成果が報じられている。近年こうした考古学的発見に対する国民の関心が高まると共に、飛鳥地方におけるこうした考古学的新発見をまとめて知ることのできる展示の必要性が高まってきている。本年から奈良県、明日香村、高取町と協力し、飛鳥地方を中心とする考古学新発見を取り上げた企画展示を、毎年1回行うことになった。本年はその第一回目として、カヅマ山古墳出土品や雷丘遺跡の調査成果などを展示した。

用途別床面積（飛鳥資料館）

用　途　名		面積（㎡）
展示部門	展示施設	976.0
	収蔵庫等	620.0
管理部門	研究室	125.0
	事務室等	619.0
共通・サービス部門・その他		2,041.3
合　　計		4,381.3

平城宮跡資料館の展示

通年の常設展示のほかに、以下のようなパネル展、速報展を実施した。

◆パネル展「日中共同　唐長安城大明宮太液池の発掘調査」

2006年5月27日～12月27日

中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所が共同で進めている発掘調査の成果を写真パネル（約30枚）で紹介したもの。大明宮太液池の共同研究は、2001年度から継続しておこなっている国際交流事業で、広大な太液池の状況、発掘遺構写真、実物大の石製欄干（長さ66cm）ほか、日中共同の調査風景、農具を利用した中国独特の発掘調査用具などの写真もあわせて展示し、観覧者の興味を引いた。

◆速報展「奈良の都を掘る－発掘成果展平城2006－」

2006年10月31日～12月27日

都城発掘調査部が2005年度に実施した平城宮・平城京の発掘調査の成果を紹介したもの。平城宮では、中央区朝堂院（平城第389次）、朝集殿院（平城394次）、平城京では、旧大乗院庭園（平城390次）などの写真パネル、調査図面、出土遺物約30点を展示した。

中央区朝堂院では、主要な軒瓦のセット、貨幣「富壽神寶」、墨書土器、朝集殿院では軒瓦セット、旧大乗院庭園では、江戸時代の赤膚焼きなど、現地説明会で公表された遺物に再会し、また、その後の調査や、整理過程でみいだされた新情報の展示は好評であった。

◆速報展「西大寺食堂院の井戸」

2006年11月21日～2007年5月16日

都城発掘調査部が実施した西大寺食堂院の井戸から発掘出土した木簡、木製品、種子、土器などを速報展示したもの。一辺2.4mにも達する巨大井戸の井戸枠の原寸大写真は観覧者の目をうばった。現地での発掘

調査の終了後、室内でおこなわれている出土遺物整理の成果の一部を展示した。

展示遺物は約30点、特に食材名を記した木簡（展示期間限定）や種子などの食材関係の実物の展示は、現地説明会以後の成果として好評を博した。

解説ボランティア事業

平城宮跡を訪れる来訪者等に平城宮跡資料館、遺構展示館、復原建物等の案内・解説をおこなう「平城宮跡解説ボランティア」事業を1999年10月から実施している。

2007年４月１日現在137名（１期生48名、２期生20名、３期生39名、４期生30名）の解説ボランティアが登録、１日当り７～10名が休館日を除く毎日、平城宮跡資料館、遺構展示館、東院庭園、朱雀門、大極殿工事現場の公開施設を拠点に活動している。

2006年度は、延べ９万８千有余名を解説、各人概ね月２～３日の活動状況である。この解説ボランティア事業は、文化庁の「文化ボランティア通信」をはじめマスコミ、奈良県のＨＰ、観光情報誌等にも何度も採り上げられ、来訪者からお礼の手紙が寄せられている。

また、平城宮跡での熟達した高度な文化解説は、好評を得ており、ボランティアの熱心な学習意欲と熱意により、「ボランティアだより」などを作成している。

研究所としては、解説ボランティア活動を積極的に支援するため活動着の配布、研究所員を交えた意見交換会を実施し、さらに研修会、学習会および、遺跡見学会の実施、解説資料や刊行物の提供をおこなっている。

2006年度　平城宮跡解説ボランティア活動状況

ボランティア活動者数	解説のべ人数			
	団体		個人	計
	学生	一般		
3,101	32,429	22,795	43,731	98,955

図書資料・データベースの公開

図書資料室では、文化財資料のナショナルセンターとなるべく、歴史・考古学分野を中心に図書及び写真資料を収集している。所外の研究者および一般の方々に図書資料室を公開し、図書資料の閲覧・複写サービスをおこなっている。

図書・写真資料（2007年3月31日現在）

図書：265,982冊

単位：冊

区分	種別	購入	寄贈	計
2006年度	和漢書	1,857	10,471	12,328
	洋書	48	118	166
累計	和漢書	76,605	178,757	255,362
	洋書	6,572	4,048	10,620

写真：865,222点

本研究所では、文化財情報の電子化をおこなうとともに公開用の文化財関係データベースの作成を継続的に実施しており、そのほとんどをインターネット経由で公開している。

公開データベース一覧

木簡データベース
木簡画像データベース［木簡字典］
全国木簡出土遺跡・報告書データベース
軒瓦データベース
遺跡データベース
地方官衙関係遺跡データベース
官衙関係遺跡整備データベース
斜面保護データベース
発掘庭園データベース
Archaeologically Excavated Japanese Gardens
所蔵図書データベース
報告書抄録データベース
薬師寺典籍文書データベース
学術情報リポジトリ

4 その他

刊行物

奈良文化財研究所学報

第１冊　仏師運慶の研究(1954)
第２冊　修学院離宮の復原的研究(1954)
第３冊　文化史論叢(1955)
第４冊　奈良時代僧房の研究(1956)
第５冊　飛鳥寺発掘調査報告(1957)
第６冊　中世庭園文化史(1958)
第７冊　興福寺食堂発掘調査報告(1958)
第８冊　文化財論叢Ⅰ(1959)
第９冊　川原寺発掘調査報告(1959)
第10冊　平城宮跡第一次・伝飛鳥板蓋宮跡発掘調査報告(1960)
第11冊　院の御所と御堂－院家建築の研究－(1961
第12冊　巧匠阿弥陀仏快慶(1962)
第13冊　寝殿造系庭園の立地的考察(1962)
第14冊　唐招提寺蔵「レース」と「金亀舎利塔」に関する研究(1962)
第15冊　平城宮発掘調査報告Ⅱ 官衙地域の調査(1962)
第16冊　平城宮発掘調査報告Ⅲ 内裏地域の調査(1963)
第17冊　平城宮発掘調査報告Ⅳ 官衙地域の調査(1965)
第18冊　小堀遠州の作事(1965)
第19冊　藤原氏の氏家とその院家(1967)
第20冊　名物烈の成立(1969)
第21冊　研究論集Ⅰ(1971)
第22冊　研究論集Ⅱ(1973)
第23冊　平城宮発掘調査報告Ⅵ 平城京左京一条三坊の調査(1974)
第24冊　高山－町並調査報告－(1974)
第25冊　平城京左京三条二坊(1975)
第26冊　平城宮発掘調査報告Ⅶ 内裏北外郭の調査(1975)
第27冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ(1975)
第28冊　研究論集Ⅲ(1975)
第29冊　木曽奈良井－町並調査報告－(1975)
第30冊　五條－町並調査の記録－(1976)
第31冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ(1977)
第32冊　研究論集Ⅳ(1977)
第33冊　イタリア中部の一山岳集落における民家調査報告(1977)
第34冊　平城宮発掘調査報告Ⅸ 宮城門・大垣の調査(1977)
第35冊　研究論集Ⅴ(1978)
第36冊　平城宮整備調査報告Ⅰ(1978)
第37冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ(1979)
第38冊　研究論集Ⅵ(1979)
第39冊　平城宮発掘調査報告Ⅹ 古墳時代Ⅰ(1980)
第40冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅠ 第一次大極殿地域の調査(1981)
第41冊　研究論集Ⅶ(1984)
第42冊　平城宮発掘調査報告ⅩⅡ 馬寮地域の調査(1984)
第43冊　日本における近世民家(農家)の系統的発展(1984)
第44冊　平城京左京三条二坊六坪発掘調査報告(1985)
第45冊　薬師寺発掘調査報告(1986)
第46冊　平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告書(1988)
第47冊　研究論集Ⅷ(1988)
第48冊　年輪に歴史を読む －日本における古年輪学の成立－(1990)
第49冊　研究論集Ⅸ(1990)
第50冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅢ 内裏の調査Ⅱ(1990)
第51冊　平城宮跡発掘調査報告書ⅩⅣ 平城宮第二次大極殿院の調査(1992)
第52冊　西隆寺発掘調査報告書(1992)
第53冊　平城宮朱雀門の復原的研究(1993)
第54冊　平城京左京二条二坊・三条二坊－長屋王邸・藤原麻呂邸－発掘調査報告(1994)
第55冊　飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅳ －飛鳥水落遺跡の調査－(1994)
第56冊　平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告(1997)
第57冊　日本の信仰遺跡(1998)
第58冊　研究論集Ⅹ(1999)

第59冊　中世瓦の研究（1999）
第60冊　研究論集XI（1999）
第61冊　研究論集XII（2000）
第62冊　史跡頭塔発掘調査報告（2000）
第63冊　山田寺発掘調査報告（2001）
第64冊　研究論集XIII（2001）
第65冊　文化財論叢III　奈良文化財研究所
　　創立五十周年記念論文集（2002）
第66冊　研究論集XIV（2002）
第67冊　平城京左京二条二坊十四坪発掘調査報告
　　旧石器時代編［法華寺南遺跡］（2002）
第68冊　吉備池廃寺発掘調査報告
　　百済大寺跡の調査（2002）
第69冊　平城宮発掘調査報告XV
　　東院庭園地区の調査（2002）
第70冊　平城宮発掘調査報告XVI
　　兵部省地区の調査（2004）
第71冊　飛鳥池遺跡発掘調査報告（2004）
第72冊　奈良山発掘調査報告I
　　石のカラト古墳・音乗谷古墳の調査（2004）
第73冊　タニ窯跡Ａ６号窯跡発掘調査報告書（2004）
第74冊　古代庭園研究I（2005）
第75冊　中国古代の銅剣（2006）
第76冊　法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告

奈良文化財研究所史料

第1冊　南無阿弥陀仏作善集（複製）（1954）
第2冊　西大寺叡尊伝記集成（1955）
第3冊　仁和寺史料　寺誌編１（1963）
第4冊　俊乗坊重源史料集成（1964）
第5冊　平城宮木簡１　図版
　　（平城宮発掘調査報告Ｖ）（1966）
　　別冊　平城宮木簡１　解説
　　（平城宮発掘調査報告Ｖ）（1969）
第6冊　仁和寺史料　寺誌編２（1967）
第7冊　唐招提寺史料I（1970）
第8冊　平城宮木簡２　図版
　　（平城宮発掘調査報告VIII）（1974）
　　別冊　平城宮木簡２　解説
　　（平城宮発掘調査報告VIII）（1975）
第9冊　日本美術院彫刻等修理記録Ｉ（1974）
第10冊　日本美術院彫刻等修理記録II（1975）
第11冊　日本美術院彫刻等修理記録III（1976）
第12冊　藤原宮木簡１　図版・解説（1977）
第13冊　日本美術院彫刻等修理記録IV（1977）
第14冊　日本美術院彫刻等修理記録Ｖ（1978）
第15冊　東大寺文書目録第１巻（1978）
第16冊　日本美術院彫刻等修理記録VI（1979）
第17冊　平城宮木簡３　図版・解説（1979）
第18冊　藤原宮木簡２　図版・解説（1979）
第19冊　東大寺文書目録第２巻（1979）
第20冊　日本美術院彫刻等修理記録VII（1980）
第21冊　東大寺文書目録第３巻（1980）
第22冊　七大寺巡礼私記（1981）
第23冊　東大寺文書目録第４巻（1981）
第24冊　東大寺文書目録第５巻（1982）
第25冊　平城宮出土墨書土器集成I（1982）
第26冊　東大寺文書目録第６巻（1983）
第27冊　木器集成図録－近畿古代編－（1984）
第28冊　平城宮木簡４　図版・解説（1985）
第29冊　興福寺典籍文書目録第１巻（1985）
第30冊　山内清男考古資料I（1988）
第31冊　平城宮出土墨書土器集成II（1988）
第32冊　山内清男考古資料２（1989）
第33冊　山内清男考古資料３（1991）
第34冊　山内清男考古資料４（1991）
第35冊　山内清男考古資料５（1991）
第36冊　木器集成図録－近畿原始編－（1992）
第37冊　梵鐘実測図集成（上）（1992）
第38冊　梵鐘実測図集成（下）（1993）
第39冊　山内清男考古資料６（1993）
第40冊　山田寺出土建築部材集成（1994）
第41冊　平城京木簡１（1994）
第42冊　平城宮木簡５（1995）
第43冊　山内清男考古資料７（1995）
第44冊　興福寺典籍文書目録第２巻（1995）
第45冊　北浦定政関係資料（1996）
第46冊　山内清男考古資料８（1996）
第47冊　北魏洛陽永寧寺（1997）
第48冊　発掘庭園資料（1997）
第49冊　山内清男考古資料９（1997）
第50冊　山内清男考古資料10（1998）

第51冊　山内清男考古資料11(1999)
第52冊　地域文化財の保存修復　考え方と方法(1999)
第53冊　平城京木簡 2　長屋王家木簡 2 (2000)
第54冊　山内清男考古資料12(2000)
第55冊　法隆寺古絵図集(2001)
第56冊　法隆寺考古資料(2001)
第57冊　日中古代都城図録(2002)
第58冊　山内清男考古資料13(2002)
第59冊　平城宮出土墨書土器集成Ⅲ(2002)
第60冊　平城京条坊総合地図(2002)
第61冊　鞏義黄冶唐三彩(2002)
第62冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉(2002)
第63冊　平城宮木簡 6 (2003)
第64冊　平城京出土古代官銭集成Ⅰ(2003)
第65冊　北浦定政関係資料　松の落ち葉二(2003)
第66冊　山内清男考古資料14(2003)
第67冊　興福寺典籍文書目録第 3 巻(2003)
第68冊　古代東アジアの金属製容器Ⅰ中国編(2003)
第69冊　平城京漆紙文書(一)(2004)
第70冊　山内清男考古資料15(2004)
第71冊　古代東アジアの金属製容器Ⅱ
　　朝鮮・日本編(2004)
第72冊　畿内産土師器集成西日本編(2004)
第73冊　黄冶唐三彩窯の考古新発見(2005)
第74冊　山内清男考古資料16(2005)
第75冊　平城京木簡 3　二条大路木簡 1 (2005)
第76冊　評制下荷札木簡集成(2005)
第77冊　平城京出土陶硯集成Ⅰ(2005)
第78冊　黒草紙・新黒双紙(2006)
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　－飛鳥池・山田寺木簡－
　　(図版編)(2006)
第79冊　飛鳥藤原京木簡一　－飛鳥池・山田寺木簡－
　　(解説編)(2006)
第80冊　平城京出土陶硯集成Ⅱ(2006)

奈良文化財研究所基準資料

第1冊　瓦編 1　解説(1973)
第2冊　瓦編 2　解説(1974)
第3冊　瓦編 3　解説(1975)
第4冊　瓦編 4　解説(1976)
第5冊　瓦編 5　解説(1976)
第6冊　瓦編 6　解説(1978)
第7冊　瓦編 7　解説(1979)
第8冊　瓦編 8　解説(1980)
第9冊　瓦編 9　解説(1983)

飛鳥資料館図録

第1冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏(1976)
第2冊　飛鳥白鳳の在銘金銅仏　銘文篇(1976)
第3冊　日本古代の墓誌(1977)
第4冊　日本古代の墓誌　銘文篇(1978)
第5冊　古代の誕生仏(1978)
第6冊　飛鳥時代の古墳
　　－高松塚とその周辺－(1979)
第7冊　日本古代の鴟尾(1980)
第8冊　山田寺展(1981)
第9冊　高松塚拾年(1982)
第10冊　渡来人の寺－桧隈寺と坂田寺－(1983)
第11冊　飛鳥の水時計(1983)
第12冊　小建築の世界－埴輪から瓦塔まで－(1983)
第13冊　藤原－半世紀にわたる調査と研究－(1984)
第14冊　日本と韓国の塑像(1985)
第15冊　飛鳥寺(1985)
第16冊　飛鳥の石造物(1986)
第17冊　萬葉乃衣食住(1987)
第18冊　壬申の乱(1987)
第19冊　古墳を科学する(1988)
第20冊　聖徳太子の世界(1988)
第21冊　仏舎利埋納(1989)
第22冊　法隆寺金堂壁画飛天(1989)
第23冊　日本書紀を掘る(1990)
第24冊　飛鳥時代の埋蔵文化財に関する一考察(1991)
第25冊　飛鳥の源流(1991)
第26冊　飛鳥の工房(1992)
第27冊　古代の形(1994)
第28冊　蘇我三代(1995)
第29冊　斉明紀(1996)
第30冊　遺跡を測る(1997)
第31冊　それからの飛鳥(1998)
第32冊　UTAMAKURA(1998)
第33冊　幻のおおでら－百済大寺(1998)
第34冊　鏡を作る　海獣葡萄境を中心として(1999)

第35冊　あすかの石造物(1999)
第36冊　飛鳥池遺跡(2000)
第37冊　遺跡を探る(2001)
第38冊　'あすか－以前'(2002)
第39冊　Ａ０の記憶(2002)
第40冊　古年輪(2003)
第41冊　飛鳥の湯屋(2003)
第42冊　古代の梵鐘(2004)
第43冊　飛鳥の奥津城
　　－キトラ・カラト・マルコ・高松塚（2004)
第44冊　東アジアの古代苑池(2005)
第45冊　キトラ古墳と発掘された壁画たち(2005)

飛鳥資料館カタログ

第1冊　仏教伝来飛鳥への道(1975)
第2冊　飛鳥の寺院遺跡１－最近の出土品(1975)
第3冊　飛鳥の仏像(1978)
第4冊　桜井の仏像(1979)
第5冊　高取の仏像(1980)
第6冊　橿原の仏像(1981)
第7冊　飛鳥の王陵(1982)
第8冊　大官大寺－飛鳥最大の寺－(1985)
第9冊　高松塚の新研究(1992)
第10冊　飛鳥の一と－最近の調査から－(1994)
第11冊　山田寺(1997)
第12冊　山田寺東回廊再現（1997)
第13冊　飛鳥のイメージ(2001)
第14冊　古墳を飾る(2005)
第15冊　うずもれた古文書(2005)
第16冊　飛鳥の金工−海獣葡萄鏡の諸相−(2006)
第17冊　飛鳥の考古学2006(2006)

その他の刊行物（2006年度）

奈良文化財研究所紀要2006
奈文研ニュースNo.21
奈文研ニュースNo.22
奈文研ニュースNo.23
奈文研ニュースNo.24
埋蔵文化財ニュース126
埋蔵文化財ニュース127
埋蔵文化財ニュース128
埋蔵文化財ニュース129
郡衙周辺寺院の研究
在地社会と仏教
西大寺食堂院・右京北辺発掘調査報告
重要文化財堀内家住宅保存活用計画調査報告書
動物考古学の手引き（英語版）
ベトナム社会主義共和国ハタイ省ドゥオンラム村集落調査報告書
飛鳥藤原宮発掘調査出土木簡概報20
重要文化財建造物現状変更説明1971～1973（本文編）
重要文化財建造物現状変更説明1971～1973（図版編）
国宝・重要文化財建造物写真乾板目録Ⅳ
研究図録海獣葡萄鏡（飛鳥資料館研究図録No. 9）
日中共同　唐大明宮太液池の発掘調査
奈良の都を掘る　発掘成果展平城2006
西大寺食堂院の井戸

人事異動（2006.4.1～2007.3.31）

●2006年4月1日付け

管理部管理課長　石坪　辰男
管理部文化財情報課長　山田　耕一
管理部管理課長補佐　藤田　徹
管理部管理課長補佐　山本　博
管理部業務課施設係長　久保　慶史
管理部管理課会計係　延原　由紀
管理部業務課研修・事業係　井手　真二
企画調整部長　岡村　道雄
文化遺産部長　高瀬　要一
都城発掘調査部長　川越　俊一
都城発掘調査部副部長　巽　淳一郎
埋蔵文化財センター長　安田龍太郎
企画調整部企画調整室長　小林　謙一
企画調整部文化財情報研究室長　森本　晋
企画調整部国際遺跡研究室長　井上　和人
企画調整部展示企画室長　杉山　洋
　兼・飛鳥資料館学芸室長
企画調整部上席研究員　千田　剛道
文化遺産部遺跡整備研究室長　山中　敏史
都城発掘調査部考古第一研究室長　松村　恵司
都城発掘調査部考古第二研究室長　西口　壽生
都城発掘調査部考古第三研究室長　山崎　信二
都城発掘調査部史料研究室長　渡邉　晃宏
都城発掘調査部遺構研究室長　島田　敏男
都城発掘調査部上席研究員　小池　伸彦
都城発掘調査部上席研究員　深澤　芳樹
都城発掘調査部上席研究員　村上　隆
埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室長　小澤　毅
企画調整部主任研究員　加藤　真二
　兼・飛鳥資料館学芸室
文化遺産部主任研究員　内田　和伸
都城発掘調査部主任研究員　玉田　芳英
企画調整部国際遺跡研究室　石村　智
企画調整部企画展示室　清永　洋平
　兼・飛鳥資料館学芸室
都城発掘調査部考古第一研究室　豊島　直博
都城発掘調査部考古第二研究室　神野　恵
都城発掘調査部考古第三研究室　高田　貫太
都城発掘調査部史料研究室　浅野　啓介
埋蔵文化財センター遺跡・調査技術研究室　金田　明大
埋蔵文化財センター特別研究員　脇谷草一郎
文化庁記念物課　渡辺　丈彦
大学入試センター管理部管理課長　花崎　仁敬
京都大学人事企画部職員課専門職員　北　幸史
京都大学地球環境学堂学術・管理掛長　吉田　善弘
大阪大学歯学研究科総務部経理掛主任　松好　克彦
大阪大学財務部資金管理課契約掛主任　中枌　義政

●2006年5月1日付け

都城発掘調査部特別研究員　渡部圭一郎
都城発掘調査部特別研究員　関広　尚世
都城発掘調査部特別研究員　廣瀬　覚

●2006年7月1日付け

企画調整部特別研究員　脇谷草一郎

●2006年7月31日付け

辞職　渡部圭一郎

●2006年10月1日付け

都城発掘調査部特別研究員　石田由紀子

●2007年3月31日付け

定年退職　川越　俊一
定年退職　出口小太郎
辞職　高橋　克壽

予算等

予算（予定額）

単位：千円

	2006年度	2007年度（予定額）
文部科学省からの運営費交付金（人件費を除く）	1,004,301	987,620
施設整備費	0	26,250
自己収入（入場料等）	28,755	29,042
計	1,033,056	1,042,912

土地と建物

単位：m²

	土地	建物（建面積／延面積）	建築年
本館地区	8,860.13	2,754.25/6,754.86	1964年他
平城宮跡資料館地区	※	10,630.53/16,149.67	1970年他
都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）	20,515.03	6016.41/9,477.43	1988年他
飛鳥資料館地区	17,092.93	2657.30/4,403.50	1974年他

※平城宮跡資料館地区の土地は文化庁所属の国有地を無償使用

科学研究費補助金（2007年5月1日現在）

単位：千円

研究種目	2006年度		（参考）2007年度	
	件数	金額	件数	金額
特定領域研究	1	5,900	0	—
特別研究促進費	0	—	1	5,800
基盤研究（S）	1	17,290	1	21,060
基盤研究（A）	4	36,530	3	46,410
基盤研究（B）	7	35,260	6	31,200
基盤研究（C）	7	5,200	4	7,930
若手研究（B）	11	8,900	12	10,200
若手研究（スタートアップ）	2	2,600	2	2,500
特別研究員奨励費	1	1,200	1	1,100
研究公開促進費（学術図書）	0	—	1	4,100

受託調査研究

単位：千円

区分	2005年度		2006年度	
	件数	金額	件数	金額
研究	19	63,440	17	62,174
発掘	10	57,071	5	52,368
計	29	120,511	22	114,542

職員一覧（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

- 奈良文化財研究所長 田辺征夫
  - 副所長 (兼)巽淳一郎
  - 管理部長 西村博美
    - 管理課長 石坪辰男
      - 課長補佐 藤田　徹／山本　博
        - 庶務係長 (兼)藤田　徹
          - 係員 延原由紀
            - 補佐員 大西和子／岩永恵子／新宮恵子／松森左千子
        - 会計係長 浅井久敬
            - 補佐員 井野由宜子／上村敬子／永井和代／山口由佳
        - 用度係長 江川　正
          - 係員 岡田祐一
            - 補佐員 港　悦子／幸田恵里子／竹田恵美
        - 専門職員 松本正典
        - 専門職員 (兼)飯田信男
    - 業務課長 佐藤敏明
      - 課長補佐 今西康益
        - 研修・事業係長 石田義則
          - 係員 井手真二
            - 補佐員 桶谷忠之
        - 施設係長 久保慶史
        - 専門職員 飯田信男
    - 文化財情報課長 山田耕一
      - 課長補佐 永井あつ子
        - 普及・資料係長 桑原隆佳
            - 補佐員 岡本倫子／内海真理
        - 図書・情報係長 太田　仁
            - 補佐員 伊藤久美／奥村多佳子
        - 専門職員 車井俊也
  - 企画調整部長 岡村道雄
    - 企画調整室長 小林謙一
      - 補佐員 菱川淳子／吉武紗代
    - 文化財情報研究室長 森本　晋
    - 国際遺跡研究室長 井上和人／(兼)森本　晋・窪寺　茂・降幡順子
      - 石村　智
        - 特別研究員 脇谷草一郎
    - 展示企画室長 杉山　洋
      - 西田紀子
    - 写真室長 (兼)岡村道雄
      - 専門職員 [藤]井上直夫
        - 補佐員 鎌倉　綾　[藤]岡田　愛
      - 専門職員 牛嶋　茂
        - 主任 中村一郎
    - 上席研究員 千田剛道
    - 主任研究員 加藤真二
  - 文化遺産部長 高瀬要一
    - 歴史研究室長 (兼)高瀬要一
    - 建造物研究室長 窪寺　茂
      - 清水重敦
    - 景観研究室長 内田和伸
    - 遺跡整備研究室長 山中敏史
    - 主任研究員 吉川　聡／平澤　毅
  - 都城発掘調査部長 [藤]巽淳一郎
    - 副部長 [平]山崎信二
    - 考古第一研究室長 [藤]松村恵司
      - [平]和田一之輔
      - [藤]豊島直博
        - 補佐員 吉岡佐和子／木寅貢志／山田昇司
        - [藤] 長谷川　透／竹本　晃
    - 考古第二研究室長 [平]西口壽生
      - [平]神野　恵／森川　実
      - [藤]小田裕樹／丹羽崇史
        - 特別研究員 廣瀬　覚／関広尚世
    - 考古第三研究室長 [平]深澤芳樹
      - [平]今井晃樹／林　正憲
      - [藤]中川あや／高田貫太
        - [藤] 石田由紀子
    - 史料研究室長 [平]渡邉晃宏
      - [平]馬場　基／山本　崇／浅野啓介
      - [藤]市　大樹
    - 遺構研究室長 [平]島田敏男
      - [平]金井　健／大林　潤／粟野　隆
      - [藤]箱崎和久／黒坂貴裕
    - 上席研究員 [平]小池伸彦／[藤]村上　隆／[藤]玉田芳英
    - 主任研究員 [藤]次山　淳
    - 専門職員 (兼)[藤]松本正典
  - 埋蔵文化財センター長 安田龍太郎
    - 保存修復科学研究室長 肥塚隆保
      - 降幡順子
    - 環境考古学研究室長 松井　章
    - 年代学研究室長 (首席)光谷拓実
      - 大河内隆之
    - 遺跡・調査技術研究室長 小澤　毅
      - 金田明大
    - 主任研究員 高妻洋成
  - 飛鳥資料館長 (兼)田辺征夫
    - 学芸室長 (兼)杉山　洋
      - (兼)西田紀子
        - 補佐員 大谷照子／米川まち子／辻本あらた
    - 主任研究員 (兼)加藤真二
    - 専門職員 (兼)車井俊也

※[平]は平城地区、[藤]は飛鳥・藤原地区を示す

2007.4.1 現在